
逃走中 ルイン・エスケープ

神聖グラントル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走中 ルイン・エスケープ

【Nコード】

N5823X

【作者名】

神聖グラントル

【あらすじ】

狂気は人の本性を暴く。人は悪。本性は漆黒の悪。殺し合う姿こそ真の姿なのだ。狂乱の果ての破滅。悪は最高の娯楽であるゲームで乱れ、散れ！「ミッション5★ブルボン 誰かと性行為を行え」

ルール

【ルール】

- 1、追跡者に捕まったり、自分が死亡したらゲームオーバーです。
ハンター
- 2、与えられたミッションは必ず1時間以内に実行して下さい（一部除く）
- 3、最後まで残れたら賞品を獲得できます。
- 4、途中棄権（自首）はできません。
- 5、1つのステージでのゲーム時間は24時間です。
- 6、ゲームオーバーしたら復活できません。チャンスは1回だけです。
- 7、自分のケータイは必ず所持して下さい。ミッションもそのケータイに送られてきます。

ブローグ

死にたくない。

まだ生きたい。

生への執着と死への恐怖が逃走者を狂わせてゆく。

ミッション失敗は脱落。脱落は死。

強制参加の闇のゲームが人の本性を暴き晒す。

狂った歯車。

それが更なる狂音を立てて動き始めた――……

【体育館ノトワイラル 確認】

……ここは体育館だろうか？ 集められた人々。子供もいれば大人もいる。男性もいれば女性もいた。

「さて、ゲームを始めましょうか」

………！！？ いきなりどこからか声が聞こえてきた。声色からして男性だろうか？ それにしてもゲームって一体何なんだ？

「ミッション失敗は脱落。脱落は死。それだけを覚えていればこのゲームで困る事はありません。それではさっそくゲームスタート！」

体育館に響く男の声。その声が聞こえたかと思うと俺の意識は途絶えた。ミッション？ 失敗は脱落？ 脱落は死、だと！？ どうなってるんだ……？

ブローグ（後書き）

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

ミッション1・2*酒だあ！ by ストイバー

【A棟3F 2-7教室ノトワイラル 確認】

俺が意識を取り戻した所は薄暗い教室だった。窓から見える風景は黒一色。どうなっているんだ？ 俺立ち上って窓を開けようとしたがビクともしない。鍵がかかっているワケじゃないのに。

教室内には30組ほどの椅子と机。全て小学生用ではなくどれも大人が使えるようなほどの大きさがある。高校生用か？ という事はここは高校なのか？

「あ、あの、君もゲームの参加者？」

「うわアツ！」

突然、後ろから声をかけられた俺は恥ずかしくも大声を上げてしまふ。俺は素早く後ろを向く。薄暗くて見にくかったが短い髪をした女の子が立っていた。俺と同じくらいだろうか？ だとすれば16歳ぐらいか？

「私はミュート。宜しくね」

「お、俺はトワイラルだ。宜しくなミュート」

ミュート、か。暗闇に慣れてきたのか彼女の顔もだんだん分かるようになってきた。彼女、なかなか可愛い顔しているな。

俺がそんな事を思っていると、2人のケータイが一斉に鳴り響いた。2人一緒って珍しいな。そう思いながらケータイを開ける。

『主催者：ミッション1*ストイバー 酔っぱらいのマネをする』

主催者？ 誰だソイツ？ それにストイバーって誰だ？ 酔っぱらいのマネをする？ どういう事だ？

俺の頭に「？」も文字が大量生産される。分からない事ばかりだ。俺は彼女の方を見る。彼女も首を捻る。恐らく彼女の頭にも「？」の文字が量産されているのかも。量産型？マークだな。……うん、面白い事言った。我ながら。

「ねえ、どうするの？」

「ん、まあ俺らには関係ないだろ。ほっとけ。どうせやってもやんなくても変んねえよ」

「そ、そうだね。どうせ何も起こらないよね」

そんな事を言いながら俺とミユートはその教室を出た。その後は雑談に雑談。不安をかき消すようにしゃべり続けた。この時、既に頭からミッション1の事は消えていた。

【A棟4F 1-3教室/ストイバー 確認】

ミッション1は私に下された。内容は“酔っぱらいのマネをしろ”。……内容はどうってことないが、“ミッション1”という事は2や3があるのか？

暗い教室。私はイスに座って考える。……っと、考える前に一応、遂行しとくか。ミッション失敗でメンドーな事になるのはゴメンだし。

「酒だあ！ 酒を持ってこいッ！」

そう言いながら私は近くのイスを蹴っ飛ばす。イスは机に当たり、音を立ててその場に倒れる。うわ、酒乱だな。酒に酔って暴れる人

だな。

その瞬間、この教室の静寂が破られ、私のケータイの着信音が鳴り響く。誰だろな？ こんな時にメールしてくるのは。出会い系サイトの勧誘メールじゃないといいケド。私は中年デブやヤリチンに体を提供する気はないんで……

『主催者：ミッション１ 成功』

マジか。アレで成功なのかい。……って言うか主催者は見てたのかよ！ うわー、恥ずかしいな。私のイメージ崩れそうだ。ま、別にいいケドな。

その瞬間、教室の扉が開かれる。私は驚いてそっちに目をやる。……暗くて見にくいケド、入ってきたのは女の子だった。

「だ、誰だ？ お前は？」

「……私は、私はレストル」

レストルと名乗る女の子はゆっくりと私に近づいてくる。な、何の用だ？ メアド交換しましょう、なんて言われてもしないぞ？ ……ていう雰囲気でもないか。

「ねえ、その、早く楽になった方がいいよ」

「は？」

「今は簡単なミッションだけど……いずれ、手に負えないミッションがやって来る。実行すら難しいミッションがやってくるの」

実行すら難しいミッション？ 難易度UPってヤツか。手に負えないってのが気になるな。その時、私のケータイと彼女のケータイがなる。同時か。偶然ってヤツだな。その瞬間、彼女はとんでもない言葉を発した！

「死んだ方がいい」

「は？ はあ！？」

「来るの！ 主催者が送って来るの！ 絶対に、絶対に今死んだ方がいい！ まだ楽な内に！」

ちよ、何言つて……！

「一度“参加者”になったらもう誰も逃げられない！ “みんな、死んだ”」

みんな、死んだ……？ な、に？ どういう事？

私の心臓が今までにないほどバクバクする。もし、危険察知センサーがあつたらきつと激しく反応しているだろう。コイツ、頭がヤバイ。何を言っているんだ、コイツは！

「ミッション成功はその場しのぎでしかないの……」

「あ、あの、どうでもいいケド、さっき届いたメールを確認させてくれないかな？」

私は別にメールを見たかったワケじゃない。本当はこの子とこれ以上、話したくなかっただけだった。このヤバい事を言いまくってる子と。

『主催者：ミッション2*テレジア 誰かに「大好きです」と言う』

愛の告白をしろってヤツか。ミッション1より少し難易度が上がったか？ いや、そんなに変わりはないかもしれないケド。

その時、私の近くですり泣き始めた。言うまでもなくレストル、が。どうした？ 私が泣かせたのか？ いや、んなハズないか。

「……このミッションで私は彼と出会い、仲間になった。でもそのせいで彼は死んだ。私の為に彼は、彼は……！」

そう言うのと彼女はケータイを握りしめてその場に座り込む。

いや、待て。待て待てマテマテ。おかしいでしょ。「このミッションで」ってこのミッション2は今来たばかりじゃん。「彼と出会い」って私は女だし、死んでもないぞ。勝手に殺すなよ。私は後80年は生きるぞ。

その時、教室の扉が開かれ、別の女性が入ってきた。ピンクの髪に短い髪の毛。年齢は10代後半、か？

「あ、ども」

「お、おお、何だ、お前は？」

私がそう言った途端、彼女は叫んだ。

「“大好きです”！」

「……ん？ん？」

やべえな。なんだ、コイツは。頭のヤバい子の次はレズな女の子か。

……私の前に レズが 現れた

ミッション1・2★酒だあ！ by ストイバー（後書き）

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

ミッション3・4*女の子の胸を揉め

【A棟3F 廊下ノトワイラル 確認】

『主催者：ミッション2 成功』

俺はケータイを閉じる。2・7教室で出会ったミユートはスマートフォンをしまつ。いいなあ、俺もスマートフォンにしようかなあ。最近、色持つてる人、増えてきたしな。

……それよりもこのゲームっていつ終わるんだろ？ なんか、面白くねえな。酔っぱらいのマネさせたり「大好きです」って言わせたり、何がしたいんだ？ 主催者は。

「ねえ、パチンコの玉ってあるじゃん。アレってさ“鉄”で出来て
いるんだよ」

「あー、そうなの？」

お前はパチンコ行つたのか？ つか、何歳だ、お前は。

「ホラ、“金を失う”と書いて鉄。パチンコの玉も鉄。つまり、パチンコするとお金を失うって事なんだよ」

ミユートがニコニコしながら言う。なかなか上手い事言うな。コイツは。俺がそう思っていると再びケータイが鳴る。俺のと彼女の。クソ、また主催者からのメールか。

『主催者：ミッション3*ビザンツ A棟からB棟へ移動しろ。2Fに渡り廊下がある。そこからB棟に向かうといいだろう。ちなみに普通の教室があるのはA棟である』

はあ…… もう、ワケ分かんねえな。今度は移動しろ、かよ。しかもアドバースつきとはな。……ん？ B棟に移動しろ？ という事はA棟とB棟があるのか？

「B棟があるなんて知らなかったね。普通の教室があるのはA棟って事は今、私たちがいるのはA棟なんだね」

「あ、ああ、そういう事になるな。B棟には調理室とか美術室とかがあるんだろうな」

俺がそう言っていると前方から誰かが走って来た。ネクタイを締め、きつちりとした服装。サラリーマン風の若い男だった。もしかして、ミッシヨン3のビザンツか？

「あ、すいません」

「ん、どうしました？」

近くで顔を見て分かったが彼は少し長い髪にメガネをかけていた。遠くからだと細かい所まで見えないもんだな。

「もしかして、アナタがビザンツさんですか？」

「ええ、そうですよ。ミッシヨン3を受けちゃったのでね、これからB棟に行くてるよ。じゃ、またどこかでね」

それだけ言うと彼は再び走り出し、近くの階段を降りて行った。ミッシヨン遂行は一時間以内だからそんなに急ぐ必要もないだろうに。まあ、早く終わらせた方がいいケド。

「あのビザンツって人、少しカッコいいね」

「え？ そう？ 普通って感じだけだな」

「それよりもこのミッションのおかげでA棟とB棟があつて渡り廊下は2階にあるって事が分かったね」

確かにそうだな。俺も今までA、Bの二つの棟があるなんて知らなかった。もちろん、渡り廊下がある事も。それが2階にある事も……もしかしてこのミッション3の狙いは俺たち全員にこの事を分からせる為のミッションだったのか？ 主催者の狙いはこれなのだろうか？

俺が色々、考えているとケータイが鳴った。

『主催者：ミッション3 成功』

……という事はビザンツさんがB棟に到着したという事か。結構走るの早いんだな。元々は陸上部かサッカー部かに所属していたのか？ まあ、俺にとってはどうでもいい事だけど。

【B棟2F 廊下ノビザンツ 確認】

ミッション成功、か。でも不思議だな。何で僕がB棟に来た事が分かったんだろ？ 主催者はどうやって僕的位置を知ったんだ？もしかしてGPSかな？

まあ、それよりももっと不思議なのは“なんで僕ら全員のメールアドレスを知っている”んだろうね？ いつの間に主催者は僕らのメールアドレスを知ったんだろ？

そう思っていると真っ暗で静かで物音が全くしなかった空間の静寂が破られた。僕のスマートフォンの音によって。

『主催者：ミッション4＊ハプスブルク 女の子の胸を揉む』

【A棟3F 廊下／トワイラル 確認】

お、女の子の胸を揉む！？ どんなミッションなんだ！ ちょっとふざけ過ぎていないか？ …… も、揉んではみたいけど。

「揉まれる子、可哀想だよ。変なミッションだね」

「うん、全くだな。ハプスブルクってヤツは男なのか？ それとも女か？ 年齢は？」

「うーん、あの体育館で見た感じ、男女比は同じくらいだったけど、若い人が多かったかな？」

あの状況でよくそこまで見ていたな。俺は半分混乱していたよ。その冷静な頭も欲しいわ。

「ねえ、どうでもいいケド、私、喉乾いた」

「いや、どうしてもすぎるだろ。それより、今はミッション4だ」
「えー、関係ないって私たちには」

そう言つとミュートは先に歩き出す。お前も一応、“女の子”なだけだな。そう心の中で呟きながら俺は彼女の後に続いた。

【A棟2F 進路指導室／トワイラル 確認】

A棟2階の渡り廊下のすぐ近くにあった進路指導室という部屋。俺とミュートはここに来た。彼女が「ここならありそう！」って言ったからだ。

「はい、トワイラルの分！」

そう言ってミュートはコップにお茶を注ぎ、俺に渡して来る。まさか、本当にお茶があるなんて……

俺は近くのイスに座り、お茶を飲む。少し濃い緑茶か？ まあ、別に飲めない事はないんだが。

「あゝ、おいしいね」

「そうか？ 俺はコーラとかサイダーの方がよかったけどな」

「えー？ 炭酸っておいしい？ 私、炭酸系のジュースって苦手なんだよね」

炭酸苦手ってマジかよ。俺は炭酸好きだけどな。

俺が残りのお茶を飲もうとした時、ケータイが鳴った。2人のケータイが。これはメールの着信音だ。2人同時に。という事は主催者からの……メール！？ ミッション5？ いや、違う。だとしたら……ミッション4の成功、メール！？

そんな！ ハプスブルクはミッション4を、女の子の胸を揉むというミッションを！ 成功、させた……！？

『主催者：ミッション4 成功』

そんなバカな！ なんでこんなクソミッションを実行したんだ！？ どうやって！？ 近くの子を襲ったのか！？ 無理やり、実行したのか！？

俺のケータイを持つ手は微妙に震えていた。なんで、実行したんだ……！

そして、ケータイがメール着信を知らせる音と共に激しく振動した！ 主催者からのメールだ……！

ミッション3・4＊女の子の胸を揉め（後書き）

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

ミッション5・6＊誰かと性行為をしる

【A棟2F 進路指導室／トワイラル 確認】

『主催者：ミッション5＊ブルボン 誰かと性行為を行え』

クソッ！ ふざけんな！ こんなミッション、するワケねえだろ
おが！！

俺はケータイを握りしめる手に思わず力が入る。その掌には汗が
滲んでいた。

「酷い！ ミッション4、5つてイタズラが過ぎてるよ！」

「全くだ！ 主催者の野郎、ふざけやがって。いい加減、ムカついてきたぞ！」

その時、2人のケータイが鳴り響いた。誰だ！ こんな時にメールしてきやがった……いや、2人同時？ という事はまさか、主催者からの、メール？ あ、ありえねえだろ。あのミッション5が実行されたのか？ そんな事、絶対にならない、だろ……？

俺はガクガクする腕と手でケータイを操作し、メールを開いた。

『主催者：ミッション5 成功』

だああああ！！ もうワケ分かんねえ！ マジどうなってんだ！
ぜってえおかしいだろ！ 主催者の野郎、ウソメール送ってんじやねえのか！！

「ねえ、私に、こんなメール、来たらどうしょ……？」

「そんなミッション無視ってやれ！」

俺はそれだけ言い放つと机を思いつき叩く。マジで意味わかんねえ。この大会だかゲームだか知らねえもの、いつの間に俺は参加になったんだ！ いつになったら終わるんだ！

その時、再びケータイが振動し、鳴った。俺のと、ミユートのが。また主催者からの…… もう、イヤだ！

『主催者：ミッション6＊ロマノフ 誰かにミッションを下せ。内容はなんでもよい』

今度は、普通のミッションか。クツ、ロマノフってヤツが変な事、考えないといいけどな。……ん？ 待てよ。「誰かにミッションを下せ。内容はなんでもよい」？

そうだ、そうだ！ やった、やったぞ！ このミッションを使えばこの意味不明な大会を終わらせるじゃないか！

「ど、どうしたの？」

「いい事を思いついたんだ！」

「いい事？ なに？」

「主催者にミッションを下すんだよ！ 今すぐ、この大会をやめろってな！」

「あ、そうだ！ それだよ！ それいいね！」

これでこのワケ分かんない大会を終わらせる。この大会をぶっ潰し、主催者を殴り倒してやる。

今まで暗く、沈んでいたミユートの表情がパツと明るくなる。彼女の顔に笑顔が戻ってきた。俺の心にも光が戻ってきた感じがした。

【A棟1F 廊下／プロイセン 確認】

私は色々と迷っていた。

「で、出来るワケ、ないじゃん……」

私の弟がそう言いながらガクガクと震える。私はミッション4のハプスブルクはさておき、ミッション5のブルボンに“罰”を与えるつもりだった。

ブルボンの受けたミッションは「誰かと性行為をする」だった。私はブルボンが誰かを犯したと思っていた。ワケの分からないミッションを自分が大切が故に実行した。他人を犠牲にしてまで。

でも、弟は言った。ブルボンが女性だったら？ なるほど、そういう考えもあるか。女性が男性を犯した。そういう考えは私にはなかった。

「ブルボンが例え、男性だとしても“死ね”っていうミッションを与えるなんて……」

「じゃあ、どうする？ “ロマノフ”」

「ミッション6＊誰かにミッションを下せ。内容は何でもよい」。今までのミッションの中で一番簡単のような気もするこのミッション。誰かに簡単なミッションを与えるだけでもいいし、ミッションに便乗して誰かを殺す事も可能だ。

「あ、アレ？ 姉さん、あっちから誰か来るよ？」
「え？」

私はロマノフが指差す方向を見る。2人の男女が走って来る。どちらも若い人だ。もしかして、私と同じ10代の学生だろうか？

「あ、ちよつといいですか？」

「え？ 何？ アナタ達は？」

「俺はトワイラルっていうヤツだ。今、ロマノフってヤツを探しているんだけど……」

ロマノフを探している？ つまり、私の弟を探している？ どういう事だ？

「な、なんで探している？」

「私たちはそのロマノフっていう人にミッションを下して貰いたいの。主催者に向けて「今すぐこの大会を終わらせろ」ってね」

なるほど！ このミッション6を利用してこの大会（？）を終わらせるのか！ それはいい考えだ。

私は弟の方を見ると無言で、少し微笑んで頷く。

「分かったよ。姉さん」

「え？ お前がロマノフなのか？」

「……うん。そうだよ、僕がロマノフだよ」

「そうだったのか。じゃ、頼むよ！」

「任せて！ 主催者、この大会を終わらせろ！！」

弟は大きな声で暗い廊下に向かって叫んだ。その声は暗闇へと消えていった。……これでいいのか？ いや、いいんだよな。一応、ミッションは下したんだし。

「ありがとな、ロマノフ！ これでこの大会はおしまいだ」

「え、あ、うん、そうだね」

「これで主催者も終わらせざる得ないよ。だって“ミッション失敗は脱落”だからね」

私はあの体育館で少しパニックに陥っていた。だからあの時、主催者の言った言葉はこの程度しか覚えていない。ミッション失敗は脱落。脱落は……この先は忘れた。

主催者がミッションに従っても失敗してもこの大会は終わりだ。主催者が脱落していなくなったらきつと大会そのものが成り立たないからな。

私はもう一度、廊下の先を見る。真っ暗な闇。それだけがそこにあった。……なぜか分からないけど、なんか不安になる。何か忘れていたような気がするの私だけ……？

ミッション5・6*誰かと性行為をしろ(後書き)

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

ミッション6*ミッション失敗は脱落。脱落は死

【A棟1F 廊下ノトワイラル 確認】

ロマノフが主催者にミッションを下してからそろそろ1時間だ。俺の記憶が正しければ確かミッションは1時間以内に実行しなければならぬ。

主催者はこのミッションにどう立ち向かうのか。実行すれば大会は終わり。脱落しても主催者不在で大会は終わり。どうなるうとも大会は終わりだ。

「ねえ、さっき電話してきた“レストル”って友達？」

「いや、俺は知らねえけどな。ミュート、お前は？」

「私も知らないよ。レストルなんて子」

つい10分ほど前、レストルと名乗る女性がロマノフのケータイに電話をしてきた。内容はミッションはどうしたのか？ という内容だった。

ロマノフは「主催者に大会を終わらせろってミッションにした」と答えた。しばらくそのレストルってヤツは黙っていたが、「大会が終わるって信じてる」とだけ言っただけ電話を切った。

アイツ、何で電話してきたんだ？ 何かあるのか？ 俺には予測がつかない。一体、なんで電話してきたんだ……？

その時、俺のケータイ、いや、全員のケータイが鳴った。という事は主催者からのメールだ！

「いいか？ 見るぞ？」

ロマノフ、プロイセン、ミュートの顔を見ながら俺は言った。こ

のメールに大会の運命が書かれているハズだ。続くのか、終わるのか。いや、どうやっても終わる。

主催者が実行しようが、失敗しようが絶対に終わるハズだ。俺はそう思いながらケータイを開け、メールを確認した。

『主催者：ミッション6 失敗』

は？　なんで、だ？　ミッション6失敗って……？

『ロマノフはミッション失敗により脱落とする』

俺の頭の思考が停止した。意味が分からなかった。どうなっているのか全然理解できなかった。なんでロマノフがミッション失敗なんだ？

俺はロマノフを見る。彼はケータイを持ったまま、まばたきもせず口を僅かに開け、画面を見つめていた。

彼は確かに「主催者」に「大会をやめろ」というミッションを下したハズだった。

「な、なんで！？　なんで！？　僕はミッション6をやったよ！！？」

その時、俺の頭にとある文字が浮かび上がった。「ミッション成功」

ミッション1から5まで全て主催者から「ミッション成功メール」が届いていた。では今回は？　今回のミッション6では届いたか？

——否。『ミッション6 成功』なんてメールは見えていない。

クッ！　なんで気がつかなかった！　ロマノフが叫んだ後、ミッションを実行した後、「ミッション成功メール」が届かなかったのになぜ気がつかなかった！？

「うわ、わぁ！ 僕はどうなっ……」

ロマノフが何かを言いかけた瞬間だった。空気を裂くような轟音と共に彼の上半身が爆発したのは……！

熱風が俺達の体に強く当たり、その衝撃でその場に倒れる。彼の周囲には熱された血と肉片が飛び散り、背筋が凍りつくような光景を作り出す。――血と肉片で水玉模様が辺り一帯に描かれた。

「う、うわぁ！」

「イヤぁッ！」

悲鳴を上げるミューとプロイセン。彼女達は服にへばりついた血と肉片を手で慌てて払いのける。

一方、上半身の消えたロマノフはその場で、崩れるように倒れ、辺りに血をまき散らす。その体からは僅かに白い煙が上がり、辺りに強烈な異臭を放つ。

爆死。それがミッション失敗者の末路……！ ミッション失敗は

脱落。脱落は……死！？

ふと、俺の脳裏にあの体育館での放送が蘇る。「ミッション失敗は脱落。脱落は死。それだけを覚えていればこのゲームで困る事はありません。それではさっそくゲームスタート！」

「脱落は、死だった……」

俺の口からポロリと出たその言葉。ミューとプロイセンは座ったまま、ガクガクと震えながらロマノフを死体を眺めていた……

しばらくその場から動けず、ぼう然としていると3人のケータイが鳴り響いた。誰も確認しようとしめない。俺だけが震える手でケータイを開け、メールを確認した。主催者からだった。

『主催者：私は「主催者」という名前ではない。私にミッションを下したければ私の本名を知れ』

そして、もう一件のメール……

『主催者：破滅へのカウントダウンはもう始まっている。お前達は私の駒でしかない。少しでも長く生きたければ本性を晒せ。理性を捨てる。他人を犠牲にし、自分だけが生き残る事だけを考えよ。』

一部の者達は分かっているようだが、最初にも言った通り、ミッション失敗は脱落。脱落は死、である。ミッション6失敗者のロマノフには爆死してもらった』

ロマノフの爆死…… やっぱ主催者の仕業かッ！ クソ！ なんてヤツだ！ 「ロマノフには爆死してもらった」その文章の下にはミッション7が記載されていた！ ……これは絶対に死者が出る最低なミッションだった……！

破滅へのカウントダウン…… 俺達は他人を犠牲にしないと死ぬのか？ もし、主催者が他人を殺せ、というミッションを下したら俺達は殺し合いをしなけりゃいけないのか……？

ミッション6＊ミッション失敗は脱落。脱落は死（後書き）

【現在情報】

逃走者：49名

脱落者：1名

ミッション7*2人で1つの物を奪い合え……？

【B棟4F 廊下／サトラップ 確認】

次は俺か！ だりイけどミッションやんねーと爆死なんだろ！？
だったらやるしかねーな！ 絶対に俺はミッションを成功してやる！ こんなんで死んでたまるかよ！！

『ミッション7*バビロン サトラップ 「目」を手に入れる。ただし、「目の模型」はこの建物には1個しかない。今から1時間後に「目」を持っていなかった方には死を与える。なお、1時間後にどちらも「目」を持っていなかった場合、両方に死を与える』

【A棟3F 2-1教室／バビロン 確認】

私とサトラップの戦い…… 目の模型が1個しかないのなら当然、取り合いになる。殺し合い、なんだな。破滅へのカウントダウンなんだ。……私は死なない。絶対に目を手に入れる！ 例え、相手を殺してでも！！

「ふ、ふふ、ははは！ 目の模型…… それが私の命の鍵だッ！」

私は扉を勢いよく開ける。開けた先の廊下には1人の男性が立っていた。彼は私を見るとぎょっとしたような表情を浮かべる。すまんな。ビビらせて。でも私には時間がない。早く、早く、サトラップよりも「目の模型」を手に入れなければ！ 私は絶対に生き残る！！

【A棟1F 廊下／――】

『ロマノフ 確認

↓ミッション6失敗：死亡

変異開始↓ハンター起動中 残り4分12秒』

木端微塵になったロマノフの上半身。辺り一帯に飛び散った肉片とおびただしい血。彼はミッション6に失敗し、脱落した。爆死という形で。

だが、彼は“再び動き出す”。飛び散った肉片や腕などが動き出し、それらは集まる。残った彼の下半身に集まってくる。

集まった肉体は細胞分裂を急速に繰り返し、次第に元の形に戻っていく。再び人型に戻っていく。

『ハンター起動中 残り2分17秒』

だが、新たに再生した部位は真っ赤な、まるで皮膚を剥いだような感じであった。それに所々がゴツゴツし、元のロマノフとは異なった状態だった。

人型に戻ったそれは立ち上がり、動き始める。全ての逃走者に課せられる新たな試練の誕生であった。

『“ハンター 起動”』

【B棟1F 美術室／トワイラル 確認】

ロマノフは死んだ。誰かにミッションを下せ。彼はその簡単なミッションで死んでしまった。俺の提案を受け入れ、実行して死んで

しまった。俺が殺したのか？ 間接的に、だが。

彼の姉、プロイセンは今、俺の横の椅子に座っている。その顔に
生気はない。弟を失った悲しみ。大切な家族を失った悲しみ。さっ
きまで一緒にいた大切な人を失った悲しみ。それがひしひしと伝わ
ってくる。

「ねえ…… 私もいつか、死んじゃうのかなあ？」

「わかんねえよ。でもミッションに失敗したら……」

ミッション失敗は脱落。脱落は死。爆死という形で死を迎えさせ
られる。強制的に、本人がどれだけ嫌がっても、どれだけ生きたが
っても死ななければならぬ。

俺は初めて人の死を見た。死がやってきた時、その人の人生は終
わる。これまで頑張ってきたものの全てが消えてしまう。

このゲームはいつまで続くんだ？ もしかして、全員が死ぬまで
続くのか？ そして、今回のミッションでも誰かが死ぬのか……？

【B棟3F 生物室/サトラップ 確認】

俺は目の模型を確かに握る。丸い球体を確かに握った。これで俺
はミッション完了だ。死は免れたようだ。厳密には“まだ”なん
だけどな。後、ミッション時間は10分程度。残り10分、これを
守り抜けば俺は死ななくて済む。

俺が生物室の出入り口に行こうとした時、その扉が勢いよく開か
れた。勢いよく扉を開け、入ってきたのは1人の女性だった。

「……………！ お前、それは！」

入ってきた女は悔しそうな目を俺に向ける。ああ、そうか。この

女がバビロンか。つまり、俺と同じミッション7を下された人間。

「わ、私は、死なない！　こんな所で意味もなく、意味もなく、殺されるかッ！」

そういつとバビロンは近くの椅子の脚を掴み、持ち上げる。俺から奪う気か。そうはさせねえよ！　俺も命かかってんだよ！

俺は持ってきていたバットを持ち、女がイスを投げる前にバットを投げてやった。グルグルと素早く回転しながらそれは女の顔に直撃する。

「う、あッ……！」

バビロンはその場に倒れる。椅子が激しい音を立てて落ちる。バットはその女のすぐ近くに金属音を立てて落ちる。

俺は素早く女の近くに落ちたバットを拾い上げる。バットの冷たく、硬い感触が俺の肌に伝わる。……殺せ。殺せ！　生かしておくのは俺が危険だ！　殺せえッ！！

空気を裂き、一気に振り下ろす。硬いモノに向かって俺は手に持つバットを振り下ろす。硬いモノにバットが当たると同時に悲鳴が上がる。

「や、めえ！　が、はッ！　も、もう、止め、て！　いた、いッ！」

構うな！　始末しろ！　俺の命を脅かす存在だ！　緊急事態だ！　殺してしまえ！　徹底的に、徹底的に！

「や、め……！　許し……！！！」

もっと、もっと強く、何度も叩け！　もっと、何度も！　殺れ！

＊

俺は息を荒げ、近くにあった椅子に座る。生物室には鉄の二オイが充満していた。俺の服は大量の返り血で埋まっていた。

俺のケータイとバビロンのケータイが鳴る。俺の成功メール……だな。

『主催者：ミッション7 バビロン サトラップ 成功』

成功……？ 俺とバビロンが成功？ 何でだ？ 「目の模型」を手に入れたのは俺で確か、「目の模型」は1個しかないんじゃないのか……？

俺がそう思っていると、俺のまるで疑問に応えるようにメールが送られてきた。

『主催者：「目の模型」は確かに1個しかない。ただ、私は「目の模型」を手に入れるとは言っていない。「目」を持っていなかった方に死を与えるとは言ったが、「目」は既に全ての逃走者が持っているハズだ』

『主催者：バビロン 死亡』

俺は何となくメールの内容を理解したような気がした。何もしなければ、誰も死ななくて済んだのか……

真っ暗な生物室には俺と死んだバビロンだけがいた。

ミッション7*2人で1つの物を奪い合え……？（後書き）

【現在情報】

逃走者：48名

脱落者：2名

ミッション8*200枚目の死

【A棟4F 1-7教室/トワイラル 確認】

最低だ…… ミッション7は人の恐怖を利用した最低なミッションだった。あのミッションのせいでまた人が死んだ。そして、ミッションはまだ続く……

『主催者：ミッション8*逃走者全員 職員室に200枚の紙を置いた。全員、1〜5枚まで紙を取れ。ただし、200枚目の紙を引いた逃走者には死を与える。尚、200枚目を誰も引かなかった場合、全員に死を与える 一度引き終わったら再度引くことは不可能。よく考えて引くんだな』

【A棟2F 職員室/レパント 確認】

今度は間違いなく誰かが死ぬんだね。アタシはまだ死にたくない。やりたい事まだいっぱいあるしね。だから、アタシは真っ先にこの職員室に乗り込んだ。幸い、アタシが一番だった。だからここで引けば絶対死ぬ事はない。

さて、何枚引こうかな……？ 一度、引けば再度引く事は不可能。つまり、48人目になった時に残り195枚以上しておかないと全員が死ぬ事になる。

「……よ、よし！」

1、2、3、4、5！ アタシは机の上にポツンと置かれていた紙の束から一気に5枚引く。これで残り195枚になった。アタシ

が5枚引いてから少しの間を置いて、メールが来た。

『主催者：レパント 終了/残り195枚/残り47名』

「へへっ！　じゃ、次はオラツチの番だな！」

アタシを押しつけ、赤髪の男の子が紙の束に手をかける。そこでアタシは気づいた。この職員室に、多くの人が集まっているのを。

「6、7、8、9、10つと！」

『主催者：カール 終了/残り190枚/残り46名』

*

【A棟2F 職員室/トワイラル 確認】

『主催者：ミュート 終了/残り16枚/残り6名』

ミュートが引き終え、残りは14枚と6名。引いてない人に俺も入っていた。

「お、俺はぜってえ死なねえよ！　こんな紙切れで死が決まってるか！」

男が紙を引いていく。引いた数は……5枚。

『主催者：サトラップ 終了/残り9枚/5名』

順番は、男性↓女性↓少年↓男性↓俺。下手すれば俺が死ぬかも知れない。ミュートが不安そうな顔で俺を見る。こんなゲームで殺

されてたまるかよ！

『主催者：ルター 終了／残り6枚／4名』

残り、6枚と4名か……

「さて、次は私の番か」

女性が紙を引く。2枚だけ。もっと引けよ！

メールが届いたがそんな事を気にせず、少なくなった紙の束を見続ける。額に汗が滲む。心臓がバクバクと激しく動く。

「つ、次は僕、か…… どうしよう……」

気弱そうな少年が泣きそうな顔で紙の束の前に立つ。5枚引けよ！ 頼むから！

俺がそう思っているとさっき、紙を引いた女性が俺に近づいてきて言った。それも耳元で、誰にも聞こえないように。

「助けて…… やろつか？」

「え？」

「あの少年が5枚引けば残り199枚。つまり、200枚目を引くのはお前の前の男になる。でも5枚以下なら男は1枚だけ引いてお前が死ぬ」

そんな事は分かっている！

「私に従うなら助けてやつても、いいぞ……？」

……クツ、命にはかえられない。俺は無言で頷いた。この時、俺

はほとんど何も考えずに首を縦に振っていた。……って、どうやって俺を助けてくれるんだ？ 再度引く事は不可能じゃないのか？

「ハプスブルク」、5枚引け」

女性が少年に向かってそう言った。……ハプスブルク？ 俺の中で数時間前の記憶が蘇る。『主催者：ミッション4*ハプスブルク女の子の胸を揉む』

そのミッションは成功した。という事はハプスブルクは生きている。……そのハプスブルクはあの少年！？

「……………！ え、で、でも」

「やれ！ 早く引け！」

ビクリと体を震わせ、ハプスブルクは慌てて紙を引く。それを見ていた男が慌てて止めに入る。彼の次に紙を引く男が。

「お、オイ！ テメエ、何をしやが……………ッ！」

鈍い音と共に男が倒れる。ハプスブルクに命令した女性の手には椅子。その脚で彼の頭を思いっきり、殴りつけたのだ。

「つてえな！ ふざけんなよ！ このクソ女が……！」

男が女性に飛びかかる。彼女を押し倒し、長い金色の髪の毛を掴む。そして、拳を振り上げ、彼女の顔面を殴りつけようとした。その瞬間だった。全員の一斉にケータイが鳴ったのは。まさか……！

「なッ！？ ハプスブルクウ……！ テメエエ……！」

鬼のような形相で199枚目の紙を握っているハプスブルクを睨みつける。彼は怯えたような表情で後ずさる。男が女性から手を離し、立ち上る。その瞬間、ハプスブルクは逃げ出した。その後を追う男。再びケータイが鳴った。

「うわああ！」

「待て、このクソガキがアツ！！」

男はすぐにハプスブルクに追いつく。彼の頭を掴み、床に押し倒し、その首を絞める。アイツ、ハプスブルクを殺す気だ！

目をカツと見開き、首を絞める男。その表情には恐怖と憎しみが宿っていた。死への恐怖と死に導いたハプスブルクへの怒りが……

「や、めッ、苦し……」

首を締め上げ、彼を殺そうとする男。その男の頭部が突然、爆発した！ まるで爆弾が爆発するように。血が飛び散り、辺りは血の池と化す。激しい異臭がした。俺は無意識の内に手で顔を覆っていた。しばらくしてケータイを確認する。

『主催者：ハプスブルク 終了/残り1枚/残り2名』

『主催者：200枚目を引く者が決定した。ガズナに死を与える』

ガズナ…… さっき死んだ男の名前、か。その時、ケータイが鳴った。

『主催者：ガズナ 脱落』

これで3人目…… 3人目の死者が出てしまった。俺は眉をしかめさせながら、ケータイを閉じた。視界に入るのはおびただしい量

の赤い液体だった。そして、それを冷ややかに見つめるあの女性がいた。

ミッション8*200枚目の死（後書き）

【現在情報】

逃走者：47名

脱落者：3名

ミッション8*殺戮のハジマリ

【A棟2F 職員室ノトワイラル 確認】

「なんで、俺を助けて、ガズナを殺すように仕向けたんだ！」

俺はあの女性に向かって怒鳴った。コイツのせいでハプスブルクは5枚引いてガズナが死んだ。それで俺は助かったのだが……

「別に。お前の方が使いやすそうだったから。それだけ」

「俺を……！」

「今、必要なのは協力、だ。協力しなければ、いずれ全員、死ぬ」

はあ？ いきなり何言ってたんだ？ コイツ。

「私の推測だと、逃走者が1人になるか、全員が死ぬまでこのゲームは続く」

「全員が、死ぬって逃走者は50人もいるんだぞ！ 全員が死ぬまでってどれだけミッションをするんだよ！」

「……気付いてないか？ ミッションは徐々にレベルが上がっている」

「……………！」

レベルが上がっている……！？

「ミッション1とミッション8。比べてみるといいだろう。どうだ？ 上がっていると思わないか？」

「くッ……………！」

た、確かにそうかも知れない。ミッション1は簡単だし、誰も死
なない。でもミッション8は誰かが必ず死ぬ。いや、下手したら全
員が死んでいたかも知れない。

その時、職員室にいる全員のケータイが鳴った。そこで初めて気
づいた。人の数がかなり減っている。いるのは俺と目の前の女性と
ミユート、ハプスブルク、プロイセンだった。他の人は面倒な事に
巻き込まれない内にと去ったのか。

「このまま、レベルが上がれば死ぬ人数も増える。ミッシ
ョン30くらいで全滅かもな」

「クッ……！ どうすりゃいいんだよ！ 主催者の下すミッシ
ョンに従って延命するだけかよ！」

「協力して主催者を見つけ、殺すしかない」

そんな簡単に出来るワケねえだろ！

「協力しなければ全滅。もちろん、協力するよな？」

「……………」

コイツに協力するのは気が進まない。でも、彼女の言っている事
は間違っていない。このままだと、ミッションによって全員が殺さ
れる。まだ、レベルが高くない内に、協力して主催者を倒すしか
ない。

「……わかったよ。協力してやる」

「よし。私は“ブルボン”だ。よろしく」

彼女がそう言った時、また全員のケータイが鳴り響いた。ミッシ
ョン9？ いや、さっきも鳴った。それがミッション9のメールだ
ったら今回が成功メールか？

俺はケータイを開いて確認する。未読メールは全部で2通。

『主催者：アゴラ 死亡』

『主催者：ゾロアスター 死亡』

は？ 2通とも死亡メール！？ どうなってるんだ！？ 何でこの2人が死んだんだ！？ 自殺？ 他殺か！？

その時、職員室の扉が勢いよく開かれる。それと共に3人の逃走者が転がるように入ってきた。3人共、かなり焦ったような顔をしている。な、何があっただんだ！？

「や、やべえ！ ガチでやべえって！」

「扉、閉めろって！」

「わ、わかって……ッ！ う、うわぁッ！」

入ってきた男3人が扉から後ずさる。扉を開けて入ってきたのは……人、じゃない！ 入ってきたのは全身が真っ赤な、皮膚をひん剥いたようなデカイ男だった。いや、人じゃない。アレは怪物だ！ ボロボロになった上半身の衣服。着ている、というよりは纏^{まと}っているだけだった。下半身の衣服は多少ボロボロにはなっていたが、まだ上半身に比べればマシだった。

片手にはボロボロになった血まみれの金属バット。その先端からは鮮血と思われる液体が滴り落ちていく。まさか……！ アゴラとゾロアスターを殺したのはコイツなのか！？

「な、なにっ！？ トワイラル！ どうなってるの！？」

ミユートが俺に抱き着いてくる。その体はガクガクと震えていた。俺に聞かれてもそんな事は分らない。むしろ、俺が聞きたかった。……アイツは何なんだ！

「くそっ！ これでも喰らえっ！」

さっき、入ってきた男が椅子を投げる。それは怪物の右肩に当たって落ちる。ダメージは全くない。それどころか怪物が椅子を投げた男の方を見た。

「ひっ、うわっ、わあっ！」

椅子を投げた男が後ずさりする。怪物が男に向かって走り出す。片手にバットを握って。俺は目を背ける。聞こえてくるのは男の叫び声と何かを殴る音。何かが壊れ、折れる音――！

「今だ！ 全員、逃げるぞ！」

ブルボンの声。俺は抱き付いていたミュートの腕を掴み、勢いよく、わき目も振りかえらずに思いつきり走った。今、俺の心を支配しているのはまぎれもなく恐怖だけだった！ 純粹な恐怖しかなかった！

「う、わっ、がっ！」

職員室を出た所で別の男の声が耳に入る。俺はふと後ろを振り返る。頭を掴まれ床に押さえつけられた男。彼はさっき職員室に逃げてきた男の1人だ。恐怖と絶望に歪んだ顔。助けを求める顔。その顔にバットが振り下ろされた。

俺は目を背け、再び、全力で走り出した。ミュートの腕を掴んだまま、より遠くへ、より遠くへ走り続けた。道中、鳴るケータイを確認せずに……

*

【A棟3F 廊下／ストイバー 確認】

まー、なんつーか。下が騒がしいな。ここの下って職員室だったよなー……。職員室で騒ぐと先生に怒られるよなー……。先生はいねえか。

でも、何の騒ぎなんだろう？ つーか、メールがさっきから立て続けに来るんですケド？ 溜らない内に確認しとくか。

『主催者：アゴラ 死亡』

『主催者：ゾロアスター 死亡』

『主催者：コルトバ 死亡』

『主催者：ウマイヤ 死亡』

ひいつ！ 全部、死亡メール！ 一気に4人も……。？ あわわ、ヤバいつて！ これで7人も死んでんじゃん！

私はその場に座り込む。ガクガクとして動けない。……。アレ？

下が静かになった。まさか、この4人は下の職員室で殺された……。？

その時、ドアを壊したような音がすぐ下から聞こえてきた。大きな人間が歩いた時に立てるような音も。……。階段を上っている……。？

私はチラリと周囲を見渡す。階段がある。4階と2階に通じる階段が。その階段から何かが上ってくる足音。

「はあ、はあ、はあッ……。！」

自分の息が荒くなる。心臓が今までにないほど、バクバクする。ミッショーン！の時とは比べものにならないほど、バクバクする。全身からイヤな汗が流れ落ちる。

何かが来る！ は、早く逃げないと！ でも脚が動かない。まる

で自分の脚じゃないかのように。なんで？　なんで！？

やがて、すぐ近くで足音。その足音は4階へと上らず3階で止まった。息を殺す。少しでも音を立てたらこっちに来るかも知れない。しばらく止まっていたが再び動き出した。コツチに向かって歩いて来た！　コツチに来たあつ！！

「ひつぐうつ……」

ガクガクと震える体。這^はいつくばるようにして後ろに下がる。せめて、どこか近くの教室に……　でも、私が教室に入る前に足音の主は姿を現した。……人間じゃなかった。怪物だった！

2メートル近くある巨大な皮膚を剥いたように赤い体。太く赤い腕。薄い黄色の爪。異様に鋭く、長かった。そして、衣服を纏わぬ上半身。その肩の後ろからはまだ小さい腕のようなもの。……新たな腕が生えてきている？

「な、なに……？」

グロテスクな怪物が私にゆつくりと近づいてくる。その口からは血が滴り落ちる。殺されるッ！　助けてえッ！

怪物は太い右腕で私を押し倒す。冷たい爪が私の顔にかかる。

「ひいッ、いやあッ！！」

私は体を必死に動かして逃げようとする。でも怪物の力の前に私は何も出来なかった。ふと、視界に入った。左腕。その先端にある長い爪。それが私を目がけて突っ込んできたのを！

ミッション8＊殺戮のハジマリ（後書き）

【現在情報】

逃走者：42名

脱落者：8名

ストイバー

・ミッション1＊ストイバー 酔っぱらいのマネをする

ミッション9＊兄弟の苦痛

【B棟4F 廊下／トワイラル 確認】

『主催者：ストイバー 死亡』

ストイバーも死んだのか。これで死んだ逃走者は全員で8人。残り42人しかいないのか。

「ス、ストイバーってミッション1を実行した人、ですよな」

「ああ、そうだな」

俺の横にいるのはミュートとハプスブルク、一緒に逃げてきたオスマンという男性。オスマンは職員室に逃げ込んできた男3人の内の1人だ。

ブルボンとプロイセンとははぐれてしまった。

「ねえ、ブルボンってさ、ミッション5の性行為をしろってミッションをした人じゃなかった？」

「そういえば……！ って事はブルボンは女性だったのか」

正直なところ、もう今はそんな事はどうでもよかった。早くここから脱出しないとミッションか、あの怪物によって殺されてしまう。

「くそっ！ 窓をぶっ壊そうにもどうやっても壊れやがらない！ 開ける事すらできねえ！」

近くの窓を壊そうと必死に動いているのはオスマン。でも窓はビクともしない。そう、どうやっても窓は壊せない。どうなっている

んだ？

「全く！ グズグズしてると来ちまうぜ！ ミッションも怪物もな！」

その時、全員のケータイが鳴った。また主催者からのミッション、か。いや、もしかしたら誰かが死んだのかも。

『主催者：ミッション9＊セレウコス ブワイフ 2人でジャンケンをしる。負けた方は脱落とする。美しい兄弟の愛を見せてくれ。尚、事前に打ち合わせなどはしてはいけない』

くそッ！ マジ意味わかんねえよ…… 人の心を弄ぶようなミッション、下しやがつて！ 俺はケータイを力強く握りしめた！ 兄弟で殺し合いをしるって事かよ！！

【A棟4F 廊下／セレウコス 確認】

俺と兄さんは階段の近くでそのミッションを見た。俺が勝てばブワイフ兄さんは死ぬ。負ければ俺が…… そんなジャンケン、俺はやりたくない。

「ど、どうする？」

「やるしかねえだろ！ このままだと2人とも死ぬんだぞ！」

「お、オイ、そんないきなり……」

兄さんは俺の手を掴む。無理やりジャンケンさせようとする。俺はつい、勢いよく手を引く。……その時、俺はバランスを崩した。後ろに倒れる。後ろは確か、階段……？

「セ、セレウコス！」

「う、うわ、兄さ……！」

【B棟1F 美術室／ブルボン 確認】

『主催者：セレウコス 死亡』

『主催者：ミッシヨン9 失敗。ブワイフは脱落とする』

私はそれだけを確認するとスマートフォンをしまう。ミッシヨン9は失敗。2人とも死んだか。まあ、いい。私には関係のない事だ。

「人って、こんなに簡単に死んでいいの？」

「次々と消されていくゲームなんだろうな。このゲームは。でも私は消されない。勝って生き残る」

「……あの怪物、弟に似ていた」

そうか、お前の弟はそんなに凄いヤツなのか。

「その弟はどこだ？ 似ているんなら倒して貰いたいものだ」

「……死んだよ」

「……………」

「ミッシヨン6を実行できずに」

……という事はロマノフの姉か。コイツは。

ロマノフに似た怪物…… そういえばあの怪物が現れたのはいつなんだ？ あの怪物に殺された逃走者は少なくとも2人以上はいる。職員室で2人、殺されていた。

ミッシヨンで死んだのがロマノフ、ガズナ、セレウコス。他は逃

走者が怪物による他殺だ。

「ロマノフの死体はどうした？」

「A棟の1階廊下に置いてきた……」

置いてきた……。なら、まだあるはずだ。ロマノフの死体は。

……。ありえないが、もし、あの怪物がロマノフだったら？ そうすれば説明がつく。突然、他殺による死者が増えた事に。

その時、2人のケータイが連続して鳴った。最も私のはスマートフォンだが。

『主催者：ストア 死亡』

『主催者：シリア 死亡』

『主催者：タキトウス 死亡』

またしても他殺。あの怪物が彼らを殺したのだろうか？ これは早く確認した方がいいかも知れない。ロマノフの死体があるかどうかを！

【B棟2F 廊下ノビザンツ 確認】

僕は辺りを窺いながら進む。あの怪物は一体何者なんだろう？

いつの間にここにやって来たんだろう？ A棟から来た逃走者によると怪物はA棟で逃走者を次々と殺していつているらしい。

さっき、届いたメールでは3人の逃走者の死亡が書かれていた。恐らく彼らも怪物によって殺されたのかも知れない。

そう思っているとまたメールが届く。遠くからもメールの着信音と思われる音が聞こえてくる。このB棟に逃げ込んだ人が多いのかも知れない。そうなると怪物がここに……

『主催者：ミッション10＊ユグノー ゴイセン プレスビテリアン ピューリタン 素手で誰かを殺したら武器を与える。また、ミッション10を受けた者を殺した者にも武器を与える。 武器はアサルトライフル このミッションは実行してもしなくてもよい』

今度は殺し合いをさせる気か。まだまだゲームが続くなら武器は欲しい。怪物が徘徊しているなら尚更、欲しいだろう。

それにアサルトライフルは軍用の武器。連射が可能な武器だ。高性能な武器。誰もが欲しがるハズだ。誰も何もしなければ誰も死なないが……

僕がその場から立ち上がった瞬間、僕のスマートフォンが鳴った。メールだ。

ミッション9＊兄弟の苦痛（後書き）

【現在情報】

逃走者：37名

脱落者：13名

ミッション10*プロイセンの決意

【A棟1F 廊下（＝ロマノフ死亡地）／ブルボン 確認】

死体はなかった。あるのは大量の血。乾いてどす黒くなった血。それだけだった。

「ど、どうなってるの？ ロマノフは、私の弟は……生きているの？」

ロマノフの姉、プロイセンがガクガクと体を震わせながら言う。ロマノフが生きている、か。違うな。アレはもはやロマノフじゃない。恐らくあの怪物の体はロマノフだろう。が、その魂はロマノフではない。

私とプロイセンのケータイが鳴る。ここに来る途中にも一度鳴った。それはミッション10を伝えるメールだった。では今度のメールは……

『主催者：タングート 死亡』

また、逃走者が死んだ。ミッションの犠牲になったのか、あの怪物に殺されたのか……？

「わ、私、ロマノフをとめる…… ロマノフを…… 弟を、とめるッ！」

涙目になりながら、プロイセンは言った。その体はさつきよりも震えていた。それを見た私は無言でポケットに潜ませていたナイフを差し出す。——これでロマノフを殺せ。

彼女は震える手でナイフを受け取る。そして、何も言わず、私の前から走り去って行った。

「期待はしてないケド、あの怪物を殺してくれたらラッキーだな」

【A棟4F 階段/ユグノー 確認】

ごめんなさい。この言葉は誰に向けたモノなのかは分かりません。人殺しになった自分に向けた言葉なのか、それとも階段から突き落とした人に向けた言葉なのか、私には分かりません。

でも1つだけ分かる事があります。私は何の罪もない人を殺しました。自分の為に殺してしまいました。死んだのは間違いないです。だって私が彼を突き落としてすぐにメールが来ましたから。

『主催者：タングート 死亡』

ぼんやりしているとまた私のケータイが鳴った。

『主催者：ミッション10*ユグノー 成功 ユグノーに武器を与える。武器はA棟4階の1ー6教室にある』

ごめんなさい。私、絶対に生き残りますから。アナタの命はムダにしません。

【B棟4F 廊下/トワイラル 確認】

ユグノーがミッションを実行した。誰も何もしなければ誰も死なないで済むミッションなのに……！ 俺はため息をつく。

もし、これがロマノフが死ぬ前までだったなら誰一人として実行しなかっただろう。でも、今や全ての逃走者が知っている。ミッシェン失敗は脱落。脱落は死、という事を。そして、怪物が徘徊している事もほとんどの逃走者が知っているだろう。

『主催者：グプタ 死亡』

『主催者：アラベスク 死亡』

怪物は次々と逃走者を殺していく。逃走者は自分の為に逃走者を殺す。こんなに簡単に人が殺されていくなんで俺には信じられない。この死亡メールを見てもどこか全く別の世界の出来事のように感じてしまう。

今、ここで何が起きているんだろうか……？

「……あ、もしもし、ブルボンさん？」

ハプスブルクが電話をかける。相手はブルボン。そういえば離れ離れになってからかなり時間が経つ。彼女達は無事だろうか？ 特にプロイセンは無事だろうか？ 彼女は弟を失った。その悲しみは計り知れない。……ロマノフは俺のせいだ……

『どうしたの？ ハプスブルク』

「あ、いや、無事かなって思ってた……」

『私が死ぬワケないでしょ？』

「あ、そうですね。すいません」

『ま、プロイセンは知らないけど』

え？

「……どういう意味ですか？」

『ああ、そうだ。これだけ教えとく。全員に伝える。あの怪物の正体はロマノフだ』

は？ 怪物の正体がロマノフ……？

『今、姉のプロイセンが怪物を殺しに行った』

俺は素早くハブスブルクのケータイを奪い取る。そして、電話の相手のブルボンに向かって怒鳴った。

「ふざけんな！ 今すぐ、連れ戻せ！！」

『その声はトワイラルか？ まあ、いいじゃないか。上手くいけばあの怪物を殺れる』

「黙れッ！ プロイセンがあゝの怪物にかなうワケねえだろおが！！」

『そうか？ もしかしたらとめれるかも知れんぞ？ ロマノフの姉はプロイ……』

「“もしかしたら”に賭けるんじゃないか！」

もしかしたら…… もしかしたらこの大会を止められるかも知れない。そんな確証のない賭け。それで結果的にロマノフは死んでしまった。

『じゃ、お前はどっしりたい？ あの怪物をほつとき、他の逃走者が殺されるのをただ黙って見ているか？』

「そ、そういう意味じゃねえ！」

『これは誰かがやらなければならない。でも普通の人間だったら無残に惨殺されるだけ』

ロマノフの姉、プロイセンだったら元ロマノフである怪物をとめられる、かも知れない、という事か！ でもそんな確証はない。現

に職員室で怪物が入ってきた時、怪物はプロイセンに見向きもしなかった。

でも、他に方法がない。また、賭けるしかないのか？ また“もしかしたら”、に賭けるしかないのか？

『幸運でも祈つとけ。プロイセンが怪物をとめられる事を祈るんだな』

「クッ……！」

そこで電話は切れた。俺は何も出来ないのか？ プロイセンに任せるしかないのか？ いや、ダメだ！ 任せるだけじゃダメだ！俺も何かをしないとダメだ！！

「ねえ、私達はどうする？」

「俺はプロイセンを助ける。彼女と協力してあの怪物を倒すんだ！」

「お、オイ！ 正気か！？ あの怪物は何人も殺していつているんだぞ！」

オスマンが俺に言う。そうか、そういえばオスマンはあの怪物に殺されかけたんだっただ。それなら俺達よりも恐怖が大きいだろう。それは仕方ない事だ。

「……あの怪物は俺がやる。プロイセンとならとめられるかも知れない」

その時、全員のケータイが鳴る。また誰かが殺されたのだろうか？

『主催者：マラッカ 死亡』

『主催者：ゴール 死亡』

『主催者：クレタ 死亡』

『主催者：ヒツタイト 死亡』

一気に4人も……！ あの怪物が彼らを殺したんだろうか？ 急がないと。急いでアイツをとめないともっと多くの逃走者が死んでしまう！ もう、誰も死なせたくない！

俺はケータイを閉じると、勢いよく立ち上った。プロイセンと協力してあの怪物を倒す！

そう思っていた矢先の事だった。再び、全員のケータイが鳴ったのは。

ミッション10*プロイセンの決意（後書き）

【現在情報】

逃走者：30名

脱落者：20名

ミッション11*プロイセンの最期

【B棟4F 廊下ノトワイラル 確認】

俺達はさつき届いたメールを確認する。主催者から送られてきたメールを。死亡メールか、ミッションメールか……

……………！　そ、そんな……………！　今度は、今度は俺に……………！？

『主催者：ミッション11*トワイラル　悲劇を受け入れる』

悲劇を受け入れる……………？　どういう意味なんだ？　悲劇ってなんだ！？　もう、充分、悲劇だろ！！

「お、今度はお前じゃねえか。トワイラルってお前だろ？」

そっだよ！　俺だよ！

その時、ケータイが再び鳴り響く。

『主催者：運命は破滅の一途を辿る。追跡者が自らと類する者を得る時、閉じ込められし者達は更なる危機へと堕ちる』

追跡者……………？　それに類する者？　どういう意味だ？

「つ、追跡者ってよあ、あの怪物なんじゃねえのか？」

「あの怪物が追跡者……………　確かにそうかも知れないな。だとしたら類する者は……………」

「そ、それって同じ怪物が他にもいるって意味じゃないですか！？」

ハプスブルクが大きな声で言う。それも考えられるな。だとすれ

ば“追跡者が自らと類する者を得する時”は怪物同士の融合か？
それで怪物が進化し、多くの逃走者が殺されるって話か。

でも、それが正解だとすれば怪物は何体も存在するのか？ あんな怪物が他にいる事になる。でも、それってありえるのか？

「でも、なんで主催者はお前に「悲劇を受け入れろ」ってミッショ
ン下したんだ？」

それもそうだ。「悲劇」ってなんなんだ？ 受け入れるって事は
この後、なんか起こるのか？ それをただ、見ていないとダメなの
か？ ……悲劇をとめるなって事か？ じゃ「悲劇」は？

「そういえば、さっきの話に戻るが、怪物同士の融合を避けるんな
ら“片方”を消せばいいんだよな？」

「“片方”はプロイセンって人が殺しにいったんじゃ……」

そうだ！ アイツを連れ戻さない！ このままじゃ、殺される
！ ……って“片方”ってなんだ？ 怪物は2体って思っているの
か？ それなら話の筋は通るが。

片方はロマノフ。もう片方はまた別の人間。ロマノフの方をプロ
イセンが…… 姉として弟をとめたいんだろ？ 姉弟、か。

「でも、本当に怪物は2体いるんですか？」

「それは間違いないだろ。じゃないと融合できないだろ？」

「……何のために融合するんですか？」

「そりゃあ…… アレ？ 何の為だ？」

………？

「一体でもあんなに強いのなら複数の方が逃走者を狩りやしくない

ですか？」

「む、むう……」

「複数体いる怪物が融合した方が強くなるのはなんとなく分かりますが、「閉じ込められし者達は更なる危機へと堕ちる」の意味がよく……」

確かにそうだ。怪物が複数いるならそのままの方が逃走者にとっては危険だ。一体の方が出会う確率は減る。逆に複数体いたら出会う確率は高くなる。

「全く…… ワケわからんな。まあ、プロイセンってヤツが怪物をぶつ殺してくれりゃ、解決するんだけどな」

「待って下さいよ。それだと、融合が起こらず、全ての逃走者が危機に陥りません」

「だから、なんだよ」

「この「全ての逃走者が危機に陥る」が悲劇だとしたら、それを受け入れず、トワイラルさんは……」

………！ 「悲劇」が起こらず、俺がミッション失敗になる……！？ ミッション失敗は、死！

「お、俺が殺されるのか！？」

「まあ、そうなるわな。まあ、プロイセンがああ怪物をぶつ殺すとは考えにくいがね」

「あ、もしかしたら、そのプロイセンさんが殺されるのが悲劇なのかも」

今度はそれが…… 一体、このミッションの真意は何なんだ？

「なるほどねえ、確かにさっき、お前はプロイセンを助けようとし

てたしな。それを妨げるミッションか。妨げてなんかあるのかねえ」
「怪物のロマノフとその実の姉、プロイセンを戦わせたんじゃないんですか？ 主催者は」

くそッ！ 実の姉弟を戦わせるなんて！ でも、何の為に？

「……2人が戦うとなんかあるのか？」

「僕にはちよつと……」

「はあ、血の繋がった姉弟を戦わせて何が楽しいんだ？」

血の繋がった、姉弟……？ 何だ？ なんか引つかかるな。姉弟、同じ両親から生まれた、似たような顔つき、肌の色、髪の色、瞳の色……似たような？ 「似た」？

その時、俺の頭で電撃が走った。全ての謎が解けた。そして、このミッションの真意も理解できた。そうか、そうか！ そういう事だったのか！！

「そうか、分かったぞ！」

「へ？」

「え、本当ですか！？」

そうだよ。これなら全て筋が通る。全ての話が繋がる！

「ミッション11の“悲劇”はプロイセンの死、だ！」

「な、なに！？ それを黙って受け入れろって事か！？」

「そして、融合は怪物同士の融合じゃない！」

「え、え？ なんで？」

「怪物化したロマノフと“類する者”は血の繋がった姉プロイセンだ！」

「あ、そうか！ 姉と弟なら確かに似ている部分も多いですよ！」

「じゃ、じゃ、プロイセンが怪物を殺すのに失敗し、取り込まれるという事か！　そういう事なのか！！」

そうなる……　そして、俺がそれを邪魔したら俺が殺される。ミッシヨン失敗で……

「そして、怪物は更なる進化を遂げるんだ。大切な姉を殺して……俺はそれを……見てるしか、ない」

【A棟4F　廊下ノプロイセン　確認】

「ロマノフ」

4本の大きな腕。皮膚を引ん剥いたような肌。巨大な爪。先端が鋭く尖った爪。その腕と爪でどれだけの人々を殺したんだろう。私には分からない。分かりたくもない。

「グツオツ……」

巨大化した体。職員室で見た時よりもその姿は不気味で大きくなっていた。もうすでにロマノフの面影は、ほとんどなくなっていた。

「ロマノフ、もう終わりにしよう。私達はここで終わろう」

不気味な、充血した血管が見える赤い眼球。瞳だけが黒色だった。その目がギョロリと動き、私を捉える。

「私だよ。分かる？　プロイセンだよ」

ナイフを握る手に力が入る。その手は震える。その震えはどうしても止められなかった。

「私と一緒にいこ？ 来世で会えるといいね」

鋭い爪を私に向け、ロマノフが走り出した。私もナイフの先端をロマノフに向け、走り出す。私とロマノフの距離は縮まる。どんどん縮まっていく。そして、私とロマノフは接触した。

——ロマノフ、死んじゃった時、置いてってごめんね。

『主催者：ミッション11＊成功』

『主催者：全ては私の駒でしかない。逃走者に希望など存在せぬ。ただただ、生きるために他人を犠牲にすればよいのだ。もがき、苦しみ、絆を壊せ。人が人としてのモノを完全に失った時、人は全生物の最上位に立つであろう。冷酷で自己だけを考える者になれ』

ミッション11*プロイセンの最期（後書き）

【現在情報】

逃走者：29名

脱落者：21名

ミッション12・13*復讐

【B棟4F 廊下ノトワイラル 確認】

俺に届いたメール。ミッション11成功。それが意味するのは1つ。プロイセンの死と怪物の進化。俺はどうすればよかったんだ？そして、この後はどうすればいいんだ……

『主催者：ミッション11*成功』

『主催者：全ては私の駒でしかない。逃走者に希望など存在せぬ。ただただ、生きるために他人を犠牲にすればよいのだ。もがき、苦しみ、絆を壊せ。人が人としてのモノを完全に失った時、人は全生物の最上位に立つであろう。冷酷で自己だけを考える者になれ』

『主催者：プロイセン 死亡』

あの時、ミッション6の時、俺がロマノフに出会わなければ、俺が余計な助言をしなければこの「悲劇」は避けられた。プロイセンは死なないですんだ。

俺のせいだ……俺のせいでロマノフが死に、プロイセンが殺され、多くの逃走者が無残に殺された。何もかも、俺のせいなんだ……俺のケータイが、ここにいる全員のケータイが一斉に鳴った。主催者からのメール、か。

【A棟2F 職員室ノユグノー 確認】

『主催者：ミッション12*ユグノー 10時間以内に誰かにメールを送れ。メールを送られた者は脱落とする。なお、ユグノーからのメールはブロックできない』

殺さないダメなんですか？ 殺さないで殺されるんですか？
メール送られただけで殺されるんですか？

『ユグノー：プレスビテリアン』

私はまた人を殺さないダメなんですか？ また殺さない私が
殺されるんですね。

『ユグノー：プレスビテリアン ごめんね』

ごめんね、長い付き合いでしたね。でも、ピューリタンやゴイセ
ンは殺せないんです。だって、アナタよりもずっと仲良しだから。
ごめんね、ごめんね！ ごめんね！！

『メールを送信しました』

【A棟3F 廊下ノゴイセン 確認】

『主催者：プレスビテリアン 脱落』

『主催者：ミッション12＊成功』

ユグノー…… 許さない。よくもボクのプレスビテリアンを、よ
くも！ ボクはプレスビテリアンが好きだった。一度も好きって言
った事はないケド、ボクは彼女の事が好きだった。

許さない、許さないッ！ 今まで友達だったケド、武器欲しさに
人を殺し、自分が助かりたいが為に友達を簡単に殺したお前をボク
は許さない！

『主催者：ミッション13＊ルイ　可愛い少年を殺す』

今度は可愛い少年を殺せ、か……　ボクは昔からよく「可愛い」と言われるケド、きつと大丈夫だ。このルイっていう人に出会わなければいいんだ。それにきつと「可愛い少年」は他にもいるハズだ。だから、そっちは心配しなくていいな。……　ボクはユグノーを探し出し、責任取らせてやる。プレスビテリアンを殺した彼女を許さない！

【A棟4F　廊下／アントワネット　確認】

まあ、何という事かしら。我が夫が指名されるなんて最悪だわ。

よりによつて殺せだなんて品の欠片もない最悪なミッション。でもミッション失敗は脱落よ。脱落は死、ね。だったらやるしかないわ。

「おっ、おっ、ヤバいな。どうしようか、アントワネット」

「やるしかないわよ。私たちにはお金と運があるわ。貴族パワー見せつけるのよ！」

そう、私たちは高貴な世界の住人。莫大なお金と多くの事業をこなす者。たかが生まれて10年とちよつとのクソガキと私たち。私たちが生きる価値はあるわ。絶対にね！

「さア、探すのよ！　少年を片っ端から殺してけばいつか成功メー ルを私たちに献上するわ！」

「おっ、おっっ！」

「では、まずは職員室へいきましよう。私は強運の持ち主。私の勘だと可愛い少年はきつと職員室にいるわ！」

【A棟2F 職員室/ゴイセン 確認】

ボクの前で泣きながら震えるユグノー。ボクは彼女に言った。ボクがプレスビテリアンを好きだった事を。

「ご、ごめん、なさい…… わ、私、知らなかった……」

知らなかった、か。ボクにはそんな事は関係ない。知らなかったから、という理由で許しはしない。絶対に責任取らせる。……殺す？ 死んでもらう？ この女を殺して、仇を討つ？

ボクはチラリと彼女のすぐ近くの机の上を見る。……黒い武器があった。そうか、アレがミッション10で手に入れたアサルトライフルか。他人を殺して手に入れた……武器。

「で、どうするの？ お前は怎么样って責任取る？」

「ぐっ…… 怎么样って言わ、れて、も…… ごめんなさい……」

そうか。責任の取り方が分からないか。そうかい。だったらボクが取らせて上げるよ。……死を与えて、ボクが、与えて上げる。プレスビテリアンにした事と同じことをしてやる！

その時、誰かがこの職員室に入ってきた。

「フッフ、居たわよ。ターゲットがね！」

「お、おおっ、アイツを消せばミッション成功、だな！」

アイツを消せば？ ま、まさか、コイツ、ミッション13を受けたルイ……！

ボクは見えない手によって背中を撫でられたかのような感覚を覚

える。恐怖が湧きだす。鳥肌が立つ。これが死への恐怖……！

「う、うわ、イヤだ！ 他の子を殺して！」

「お、お前は、俺に殺されるんだ！ 俺の成功の為に、絶対殺す！」

狂気を帯びた目で言うルイの手には血まみれのナイフが握られていた。どこでそんな物を見つけてきたんだ！

「これはね、私たちがさっきまでいた4階に落っこちていたものよ。運よく拾ったのよ」

運よくって、そんなのアリかよ！ 意味分かんない！

「死ねえッ！」

ナイフが振り下ろされる。赤い血の付着したナイフがボクを目がけて振り下ろされた。胸に激痛が走る。ボクの体は後ろに、崩れるようにして倒れていった。

ミッション12・13*復讐(後書き)

【現在情報】

逃走者：28名

脱落者：22名

ミッション14＊ルイの側近達

【A棟2F 職員室／ユグノー 確認】

この職員室は呪われているのかも知れません。乾き、茶色くなった大量の血。荒らされた机と椅子。まだ、新しい血。死んで動かなくなった彼らの体。

『主催者：ゴイセン 死亡』

『主催者：ミッション13＊ルイ 成功』

『主催者：ルイ 死亡』

『主催者：アントワネット 死亡』

私は銃口から煙を上げるアサルトライフルを近くの机に置く。さつきまでこの部屋で生きていた人達はみんな死んでしまいました。私の友達だったゴイセンはルイに殺され、私は彼を助けようとアサルトライフルを使ってルイを射殺し、その勢いでアントワネットという女性をも一緒に殺したんです。

みんな、みんな殺しました。ハハハ…… 私って最低ですよ。でも、私、ちょっとだけ思いました。ここで死んだから、今死んだから、これ以上、苦しめないで済む。彼らは解放されたんです。死んでこの地獄から解放されたんです。安らかに眠ってください。

【B棟1F 廊下／テュルゴー 確認】

我らルイ様の6大側近の前に立ちはだかるのは怪物！ これはかなりヤバイ！

「ルイ様の下にたどり着く前にこんな怪物に出くわすとは何たる事！」

「ええい！ 怪物と言っても所詮は生き物だあ！」

「そうである！ 脳に銃弾ブチ込めば即死である！ ルイ様の側近、黄の側近であるこのファイエットがやつつけるのである！」

そう言うファイエットはマグナムを取り出し、狙いを定める。
よし、やっちまえ！ お前の腕なら脳を撃ち抜ける！

「死ぬのであるッ！」

力強い音と共にマグナムの銃口からマグナム弾が飛ぶ。それは回転し、空気を切り裂きながら一直線に怪物の頭目がけて進む。いける！ これなら倒せるぞ！

マグナム弾が怪物の頭にめり込む。が、しかし、怪物は倒れない。それどころか、こっちに向かって走ってきた。

「えッ！？ ちょっと！ なんて倒れないのであるっ……！」

血しぶきが舞う。怪物の6本の腕。その腕から伸びる長い爪。それによってファイエットは切り裂かれてしまった。

「ひいッ！ 緑の側近、ネツケルが斬つてやる！」

ネツケルは長い剣を振り回しながら怪物に突っ込んでいく。怪物は赤い目でチラリとネツケルの姿を見る。その瞳に知はない。本能のままに殺戮を繰り返す目だ。

「ギヤアッ！」

「ネ、ネツケル……！」

長い剣が幸いしたのか、先端が怪物の心臓部に刺しこまれていた。だが、刺し込んだネツケルは怪物によって突き刺し殺されていた。おびただしい血が怪物の赤い腕を更に赤く染める。

「よし、あと一歩だあ！ 赤の側近、マザランが爆破してやらあ！」

マザランが懷から赤色のダイナマイトを取り出す。それに火を……

「グエ、アア……ッ！」

「え？」

マザランが倒れ込む。その胸には長い剣が突き刺さっていた。な、なんで剣が？ はっと怪物の方を見る。怪物の心臓に突き刺さっていたネツケルの剣がなくなっていた。あの怪物、自分に刺さっていた剣を引き抜いて、マザランに投げつけたのか！

「ちくしょ！ もう3人も消されちまったぞ！」

「……………！ そんな、どうしょ……………！」

「ま、待て、焦るな、黒のコルベール、白のミラボー！」

こんな非常事態に焦るなっていうのは無理か？ くそッ！ こんな怪物さえいなければルイ様の下に行けたというのに！ って、何でミラボーはケータイを見ているんだ？

「大変だよ！ ルイ様が……………脱落している！ 青のテュルゴー！」

へ？ ルイ様がお亡くなりになっている？

「オ、オイ、テュルゴー、後ろ！」

……後ろ？　そこで意識は途絶えた。途絶える直前、激痛を感じたような気がした。

【B棟2F　生徒指導室／トワイラル　確認】

次々入ってくるメールは俺らを精神的に追い詰める。こんなやつてアリかよ。

『主催者：ファイエット　脱落』

『主催者：ネツケル　脱落』

『主催者：マザラン　脱落』

『主催者：テュルゴー　脱落』

『主催者：コルベール　脱落』

『主催者：ミッシヨン14＊逃走者全員　逃走者の中にいるルイの一族、側近を全員（以後ターゲットと表記する）殺せ。今から1時間後、生き残ったターゲットの人数×3人をランダムで脱落させる。因みに現在、ターゲットは6人いる』

確か生き残りは全員で20人。ターゲットが6人。このままだと1時間後には2人しか生き残れない。殺るしかないのか……？

ミッション14*ルイの側近達（後書き）

【現在情報】

逃走者：20名

脱落者：30名

ミッション14*ターゲットを倒せ

【A棟2F 会議室/フィリップ 確認】

チツ…… 今度のミッションは俺らがターゲットかよ。下手に「私はルイの弟です」なんて言ったらぶち殺されかねない。それに俺自身、ターゲットを消していかないとランダムで殺されるかもしれないねえ。

「クツソ、どうするんだ？ フィリップ」

今まで行動を共にしてきたヴァロワが言う。コイツはルイ一族の1人。つまり、ターゲットの1人だ。コイツが生き延びれば3人が死ぬ。

「……こうするんだよ」

会議室に乾いた音が鳴り響いた。それと共に俺の腕に痺れが走る。音を立ててヴァロワが倒れた。頭から血を噴いて。

俺からすれば困るんだよ。生き延びてもらうと、な。こうやって一族と側近を消していけば俺の生き延びる確率が上がる。

ククツハハハッ！ 俺以外の一族と側近はみんな死んでしまええッ！

その時、乾いた音が再び鳴り響いた。俺はビクリと体を震わせる。その場から動けない。手だけがずっと動き、胸に手を当てる。何かべつとりとした生温かい液体に触れる。目を落とし、それを見る。赤い液体だった。

俺は顔を僅かに動かし、会議室の出入り口を見る。ブルボンがいた。あの“ルイの娘”……！

『主催者：ヴァロワ 脱落 ターゲット残り5名』
『主催者：フィリップ 脱落 ターゲット残り4名』

【A棟1F 3-1教室/シャルル 確認】

危ねえな。危うく殺されるところだったわ。でもまあ、俺が先に殺った。

俺は床に寝転がり、もう動く事のない、男を足で蹴る。彼は少し前に出会った人間だ。名前は確かルターだったか？ 死んだ人間の名前なんかもうどうでもいいが。

「よし、紫のレジーム。他の一族と側近を探し出して殺るぞ」
「へ、ヘイツ！ 撲滅作戦開始ですなッ！」

俺はニヤリと笑い、教室から出ようとした。だが、その瞬間、頭に激痛が走り、俺は倒れ込む。

「グッアッ！ な、何をす、る！」

俺が振り返ろうとするが、その前に後ろから覆い被さられる。そして、俺の懷からハンドガンを奪った。それを俺の頭に突きつける。

「へへッ！ 撲滅作戦、開始ですなア…… その最初の犠牲者はアンタですよ？ シャルル殿」

「なッ、よ、よセッ！ お前、側近の分際で俺を……！」

「命には変えられないでっせ。アンタには長年、世話になったが死

んで頂きますぜ」

ク、クソッ！ 死んでたまるかッ！ 殺されてたまるかッ！

俺は素早くポケットに忍ばせてあった猛毒の針を引き抜き、それをレジームの腕に突き刺す。が、それとほぼ同じくして、俺の意識は消え去った。

【B棟3F 視聴覚室／クリミア 確認】

「ニヤハハハ…… 見ろっ！ このメール！」

『主催者：ルター 脱落』

『主催者：シャルル 脱落 ターゲット残り3名』

『主催者：レジーム 脱落 ターゲット残り2名』

俺はスマートフォン画面をピューリタンという女に見せる。どーよ！ これはいい報告でしょっ。

「ターゲットが残り2名、か。お前はターゲットじゃないのか？」

「ノー、だぜっ。俺はノーターゲットだよ」

彼女に背を向け、俺は視聴覚室の椅子に座る。このミッションを乗り越えたらまた安全になれる。万が一、他人を殺せってミッションが来てもだいじょぶっ！ だって、その時は彼女を殺せばいいんだからっ！

俺はチラリと彼女に目を向ける。彼女は椅子に縛り付けられたまま。まあ、あんだけ強く縛ったのだから解ほどかれる筈もないなっ。

そして、この視聴覚室には鍵をかけた。これでだーれも入ってこないっ。つまり、さいこーに安全な部屋だという事っ。

因みに鍵は職員室からパクった。他の人間が同じ事を考えないよちな

オスマンが敵意丸出しで言う。そのセリフと雰囲気慌ててビザンツさんが言う。

「ま、まさか！ とんでもない！ それよりもB棟1階で変な物を見つけたんだ！」

変な物？ 何だ？

「上手く説明できないケド…… そうだね、アレは巨大な柱といった方がいいかな……」

「柱？ どんな？」

「僕が見た感じ、その柱は白い鉄製の装甲に覆われている感じだったが、装甲と装甲の間が所々にあって、そこから暗色の紫色の光が見えていた。そして、その部屋は全体が銀色の金製属だった」

部屋全体が金属製？ 巨大な白色の装甲で覆われた柱？

「はあ？ そんなモン学校にあるかよ！」

オスマンがビザンツに鋭い視線を向ける。彼はさっきから気が立っている。ミッシヨン14で死ぬかもしれないという不安と恐怖が彼をそうさせているのだろう。

「よ、よし、行こう！」

「行くんですか？」

「……うん、行こうよ。ここでじっとしていても何も変わらないし！」

俺はビザンツに向かって小さく頷く。——そこに連れて行ってく

れ。その意思を彼に伝えたのだ。

ミッション14*ターゲットを倒せ(後書き)

【現在情報】

逃走者：15名

脱落者：35名

A棟2F 職員室

ユグノー／女性／16

A棟2F 会議室

ブルボン／女性／16

B棟1F 廊下

ミラボー／女性／21

B棟2F 生徒指導室

トワイラル／男性／16

ミュート／女性／16

オスマン／男性／29

ハプスブルク／男性／14

ビザンツ／男性／20

B棟2F 視聴覚室

ピューリタン／女性／24

クリミア / 男性 / 16

居場所不明

レパント / 女性 / 15

カール / 男性 / 15

サトラップ / 男性 / 19

テレジア / 女性 / 18

レストル / 女性 / 18

ミッション14*マードネス・コンピューター

【B棟1F 東側・調理室前（美術室とは反対側）ノトワイラル
確認】

調理室前。そこに1人の女性が倒れていた。彼女の左腕は肩から
無くなり、背中からは大量の血。ハプスブルクとミュートは顔を背
け、オスマンは瞬きもせず^{まはた}に彼女を見ていた。

「ど、どうした!？」

「う、あッ…… 私、は白のミラ、ボー。ル、イ様の側近……」

ルイの側近!？ ターゲットの1人か！ 確か、ターゲットの数
×3人がランダムで殺される。それが頭に浮かんだが、俺は彼女を
助ける方法を考えていた。この人が生き延びれば3人がランダムで
殺される。それは俺かも知れない。でも、俺には彼女を見殺しには
出来なかった。

「か、怪物に、襲わ、れ、みんな、死…… 私も、殺され、かけた」
「怪物!？ まさか、近くにつて事はないよな!？」

オスマンがかなり慌てて言う。そういえば彼は職員室で怪物に殺
されかけたな。だから、俺達よりも敏感に反応してしまうのだろう。

「だ、大丈夫、怪物は、A棟、行った……」

「と、とにかく、どこかで治療しないと死んじゃうよ!」

「……も、手遅れ、何となく、分か、る。だから、絶対に、主催、
者を、倒し、て」

それだけ言うともミラボーはがっくりと力が抜けたように倒れた。辺りには大量の血。出血多量で彼女は死んでしまった。

俺は口には出さなかった。が、心の中で誓った。――絶対に主催者を倒す、と！

【B棟1F マードネス・コンピュータルーム／ハブスブルク
確認】

「調理室」の扉を開け、僕らは確かに「調理室」に入ったハズだった。でも、その部屋は全く違った。そして、学校にあるハズのない部屋だった。

薄暗い金属製の壁と床。部屋の奥には巨大な柱。その柱は確かにビザンツさんが言った通り、何かが白い装甲で覆われている感じだった。装甲と装甲の間から見えるのは紫色の柱と思われる物。

「な、なんだ？ これりゃ？」

「ワタクシは“マードネス・コンピューター”。このゲームにおけるミッションを担当するコンピューターです」

「じゃ、喋った！？」

「……ミッションを管理するコンピューター？」

トワイラルさんの目つきが鋭くなる。ミッションを管理するって事は……まさか、コイツが「主催者」！？ みんなを殺し続けてきたのはコンピューターなのか！？

「アナタ達の想像している事は合ってますよ。ワタクシがミッションを全員に下しているのです。ミッションを下し、逃走者を狂乱の渦に叩き落す、それがワタクシの仕事です」

「ふ、ふざけんなア！」

トワイラルさんが生徒指導室から持ってきた金属バットを振りかざし、マードネス・コンピューターに向かって走る。

「お前のせいで、プロイセンやロマノフが！」

金属同士が激しくぶつかり、火花が散り、金属特有の音が鳴り響く。バットで殴った所にはヒビが入る。

彼に続くようにしてオスマンさんがハンドガンの銃口を向け、発砲する。白い装甲に黒い穴が開き、亀裂が入る。

「やめなさい！ ワタクシを破壊する気ですか！？」

「当たり前だろオが！」

かなり強い力で装甲を殴りつける。装甲の一部が崩れ落ちた。崩れた部分からは紫色の部分が露出する。あの紫色の部分はなにで出来ているんだ？

「ぶつ壊れるお！」

「追跡ハンターにミッションを下す。トワイラル・ビザンツ・オスマン・ミュート・ハプスブルクを処刑せよ！」

その声と共に柱の両サイドからスーツを着た男が出現する。アレが追跡ハンターか！

「ハンターは俺に任せろッ！」

「僕も戦おう！」

オスマンさんとビザンツさんがそれぞれのハンターに向かう。オスマンさんはハンドガンを持って、ビザンツさんは剣を持って……

ハンターは素手だから勝てるか!?

「わ、私は何か武器になりそうな物、探してくる!」

そう言つとミュートさんは扉を開けて出ていく。僕もその後にく。部屋から出る時、一瞬だけ振り返つて見た。そこには紫色の部分に向かってバットを振り下ろすトワイラルさんの姿があつた。

【B棟1F 廊下/ミュート 確認】

暗い廊下を走るのは私とハプスブルク。学校という所で武器を探し出すなんて不可能に近い。でも、あそこにいて私に何が出来るだろう? 何も出来ないよね。だったらせめて足手まといにならないようにする。

私とハプスブルクのケータイが鳴る。また誰かが死んだのかな? もしかして次のミッション? どちらにしても私は確認しなくちゃならない。

『主催者: ミッション14*失敗 生き残ったターゲットは1名。従つて3名を強制的に脱落させる。脱落者はオスマン・ユグノー・テレジアの3名とする』

そんな……! オスマンが脱落なんて!

私の脳裏に彼の顔が横切る。出会つた間もない人だったケド、いざいなくなると悲しさを感じる。でも、ここで悲しんでいる場合じゃない。あのコンピューターを破壊しないと、この様な悲劇が繰り返される。トワイラルが死んじやうかもしれない!

「あ、アレ! あそこに落ちているのってダイナマイトじゃないで

すか!？」

ハプスブルクが廊下の奥を指差す。そこには辺り一帯に飛び散った大量の血。人の体の一部と思われる赤い塊。無造作に落ちている長剣。2つの銃。4本のダイナマイト。

誰のかは知らないケド、私はダイナマイトを拾い上げる。これを使えばあのコンピューターを破壊できる。私はそれを拾い上げると元来た道を一目散に戻り始めた。

戻り始めた時、再びケータイが鳴った。

【A棟4F 1-3教室/ユグノー 確認】

『主催者：ミッシェン14*失敗 生き残ったターゲットは1名。従って3名を強制的に脱落させる。脱落者はオスマン・ユグノー・テレジアの3名とする』

私、死ぬんですね。仕方ないですよ。名前も知らない逃走者を、友達のプレスビテリアンを、ルイとアントワネットの4人を殺したんですからね。当然の報いなんですよね！ ごめんね、私も今からそっちに……！

【B棟1F マードネス・コンピュータルーム/トワイラル 確認】

オスマンが死んだ。ロマノフと同じように爆死して、何の前触れもなく……でも、そのオスマンを殺したマードネス・コンピューターもまた死んだ。いや、壊れたというべきか？

マードネス・コンピューターは煙を上げて、赤い炎に包まれる。

ミュートの持ってきたダイナマイトを使ったら一発だった。

「こ、これで終わったの？」

「……終わった事を信じたいですケド……」

もし、コイツが全ての元凶なら、もうこのゲームは終わりだ。俺達が戦っている最中に届いた“ミッション15”を実行しなくてもいいハズだ。

ミッション14*マードネス・コンピューター（後書き）

【現在情報】

逃走者：11名

脱落者：39名

A棟2F 会議室

ブルボン／女性／16

B棟1F マードネス・コンピュータールーム

トワイラル／男性／16

ミュート／女性／16

ハプスブルク／男性／14

ビザンツ／男性／20

B棟2F 視聴覚室

ピューリタン／女性／24

クリミア／男性／16

居場所不明

レパント／女性／15

カール／男性／15

サトラップ／男性／19

ミッション15＊生死を決める紙

【B棟3F 視聴覚室／クリミア 確認】

むう、ミッション14で死ななかったのは良かった。ベリーグットってヤツだなっ。しかし、このミッションはどうしたものかな……？

「クツ、ユグノー……！ お前まで死ぬなんて！」

「ニヤハ？ 死んだユグノーと知り合いかつ？」

「ユグノーは私の妹みたいなヤツだ……」

へー、あつそ。きょーみねえつ。今はこのミッション15だつ。

これはかなりヤバいんじゃないか？

『主催者：ミッション15＊逃走者全員 B棟2Fにある図書室に箱を置いた。その箱から紙を1人1枚抜き取れ。ただし、数字が書かれた紙を引いた場合、数字の数だけ逃走者を指名しなければならぬ。紙は全部で20枚ある。その内、5枚の紙に1～5の数字が書かれている。指名された者は脱落。数字が書かれた紙を引いた者も脱落とする』

むむつ。コイツを連れてさっさといくしかないなっ。でも、もしコイツが数字が書かれた紙を引いたら俺はどうなるっ！？

【B棟2F 図書室／トワイラル 確認】

ミッション15。主催者であるマードネス・コンピューターは破

壊された。だから、俺達はもうミッションを実行する必要はない……ハズ。

でも、もしかしたら主催者が複数という事も考えられる。もし、そつだとしたらミッション15を実行しないと全員が脱落になる。ミッション失敗で……！

「ニヤハハハ…… じゃ、全員揃ったよーなんでっ、来た順に引いてきますかっ！」

ネコみたいに鼻の横から、左右に3本の長いヒゲを生やした男が言う。笑い方もネコみたいだな。

「ではっ、トップバッターはピューリタンちゃんからどーぞっ！」

クリミアが言うと同側から1人の女性がゆっくりと箱の近くに近づく。……クリミアを睨んだように見たのは俺の気のせいかな？

彼女が箱の中へ手を入れる。もし、彼女が「5」を引いたら本人を含めて6人が死ぬ。その次の人が「4」を引いたら5人死んで、残りは1人となる。もしかしたら、このミッションで全員が死ぬかも知れない。

ピューリタンが紙を取り出す。俺はゴクリと口の中に湧いた唾液を飲み込む。その紙に数字が書かれていたら……

彼女も震えながら、折りたたまれた紙を開ける。しばらくの無言。一体、紙には何が……。

「……大丈夫だ。×としか書かれていない」

俺はほっと息をつく。1人目クリア。残りは10人だ。

「よおしっ…… 次はこの俺様だっ！ ……はい、やあっ！」

クリミアが勢いよく箱に手をつ込み、勢いよく紙を引き抜く。
慎重だったピューリタンとは大違いだな。

「よしっ！ × だあっ！」

クリミアが手を叩いて喜ぶ。残り…… 9人。紙は18枚。
その次に箱に手を入れたのは若い男、サトラップだった。

「こ、ここまで来て死ぬかよ！ このクソがッ！」

クリミア同様、勢いよく紙を取り出す。その額には汗が滲んでいた。紙を開け、ニヤリと笑う。あの様子だと×…… か？

「次、いけよ」

次は俺だ。ゆっくりと箱に近づく。心臓がドクドクと激しく鳴る。全身から汗が滲む。俺はぎゅっと手を握る。残り8人。紙の数は17枚。その内、ハズレは5枚だから12枚が安全な紙だ。

「はあ、はあ…… 大丈夫、だよな！」

俺は目をつむり、箱の中に手を入れる。指先に紙の感触が伝わる。何枚かの紙に触れる。これで自分の生死と他人の生死を決める。

これか？ それともこれがいいのか？ いや、さっき触った紙がいいのか？ もしかして、この紙には数字が書かれているんじゃないのか？ 不安が頭をよぎる。

「こ、これだ！」

俺は1枚の紙を握り、箱から取り出す。その紙は白色の紙。この紙が俺の人生を、他の人の人生を決めてしまう。俺は震える手で、ゆっくりと紙を開く。

「ど、どうですか？」

「大丈夫？ トワイラル」

俺は目を僅かに開け、震える指先で開けた紙を見る。うつすらとした視界に入ったのは……黒い？ 黒いってそんな！ そんな！

「うわぁッ！」

「トワイラル！」

「ニヤ、ハッ！？ まさか、引いちゃったっ！？」

俺はつい、紙を床に落としてしまった。ビザンツとミユートが慌てたように近寄るが、その前に俺がその紙をもう一度見た。黒いのが印刷されているのは分かったけど、しつかりとは見てない。一体、いくつの数字が……！

「あ、アレ？ ×じゃん？」

「あ、ああ……」

俺はふらりと尻餅をつく。紙には黒色で×が書かれていただけだった。

「次、私だよな？」

「え、あ、ああ」

ミユートが震える声で言いながら箱に手を入れた。彼女はすぐに紙を取り出す。それをゆっくりと開く。……ニコリと笑った。

「×、だよ」

俺はまだ震える体で立ち上がり、ミユートに微笑んだ。

「じゃ、じゃ、僕も引きますね」

ミユートの次、ハプスブルクか。残り6人。紙は残り15枚でその内10枚が安全な紙……。そんなに確率は高くない。きっと大丈夫だ。でも、後半は危ない。もし、後半の誰かが数字の紙を引いたら、誰かが指名されて、その人は死ぬ。それがもしかしたら俺達の誰かかも知れな……

「そ、そんな！　なんで！！？」

……え？　ハプスブルクの悲鳴のような声に俺は彼の方を向いた。紙が落ちていた。……「4」？

ミッション15*生死を決める紙(後書き)

【現在情報】

逃走者：11名

脱落者：39名

【ミッション15の順番】

- 1、ピューリタン / 女性 / 24
- 2、クリミア / 男性 / 16
- 3、サトラップ / 男性 / 19
- 4、トワイラル / 男性 / 16
- 5、ミュート / 女性 / 16
- 6、ハプスブルク / 男性 / 14 (↑現在ここ)
- 7、ビザンツ / 男性 / 20
- 8、レストル / 女性 / 18
- 9、ブルボン / 女性 / 16
- 10、レパント / 女性 / 15
- 11、カール / 男性 / 15

ミッション15*指名は破滅

【B棟2F 図書室/ミユート 確認】

私はぼう然と落ちた紙を見つめていた。「4」という数字が書かれた紙。その近くに座り込むハプスブルク。

ミッションを下すマードネス・コンピューターは破壊され、ゲームは終わったハズ。だったら、例え、誰かを指名しても、もう誰も死なない。このミッションもやる必要はない。

でも、トワイラルはミッション15をやらないと言わなかった。もし、ゲームが終わってなかったら？ もし、そうだったら全員が殺される。

ミッション6以来、彼はかなり慎重になっていた。まだ、ロマノフの事が頭にあるんだ。

「ニヤハッ!? 4人も指名死するのかいっ!」

「おい、マジかよ! テメエ、俺を指名すんじゃないぞ!」

「ア、アタシを指名しないでッ! お願いだからッ!」

「オラッチはまだ死にたくねえ!」

みんな慌てたように言う。さっきまでの静寂は消え、図書室は一気に騒がしくなる。……誰もハプスブルクの心配はしない。ただ、自分の心配だけをする。

「うつ、ああ…… 僕、まだ死にたくないのに!」

「落ち着くんだ。ハプスブルク君。マードネス・コンピューターは確かに破壊した。もし、あの機械が主催者だったらすでにゲームは終わっている。希望を失うな!」

ビザンツさんがハプスブルクの肩を叩き、励ます。彼の言う通り、マードネス・コンピューターが主催者だったらこのゲームは終わったハズ。……ハズなんだけど……

「ビザンツ、さん…… もし、終わってなかったら……！」

そう。その「もし」が一番怖い。終わってなかったら、ゲームは続く。ハプスブルクも、指名される4人も死ぬ。どんなに本人が死にたくななくても殺される。

私もハプスブルクの近くに行こうとした時だった。あの音が鳴ったのは。——希望という光はかき消された。全員のケータイが鳴った。

『主催者：ハプスブルク 4名を指名し、破滅に導け。指名方法は相手の名前を言う』

『主催者：ビザンツ 脱落 残り3名を指名せよ』

え？ え、ええ？ 何で、何でビザンツさんが……！！

私がそう思っていると近くで爆音が聞こえた。私の指に温かい何かが付着した。背中にゾクリとしたものが走る。全身の毛が逆立たかのような感覚を覚える。

「ひイツ！ 爆発したぞコイツ！」

「ウ、ウソだろ！？ 何でコイツ死んだんだ！？」

私は爆発した方向に目を向けられない。怖い！ 人がこんなにも簡単に死んでしまうなんて！

「ゲームは終わってなかったのかッ！」

トワイラルの声。私は首だけ少し動かし、トワイラルの方を見る。彼は悔しそうに唇を噛み締めていた。その目にはうっすらと涙の膜が……

「……メールが来る直前、お前は1回だけビザンツ、と言った。指名者の意思に関わらず、名前を言えば脱落のようだな」

「ブ、ブルボ……」

「よ、よせッ！」

「……………！」

ハプスブルクはハツと口を押える。その時、私は彼の近くに倒れるビザンツさんを見てしまいそうになり、慌てて目を手で覆い隠す。もう、イヤだ！ 何が目的でこんなゲームをしているの！？

【B棟2F 図書室／トワイラル 確認】

ビザンツが死んだ。ゲームは終わってなかった。後3人死ぬ。その後、ハプスブルクも死ぬ。みんな死んでいく。俺達がマードネス・コンピューターを破壊したのは意味なかった。

「ハプスブルク」

「な、何ですか？」

「キャアッ！」

女性の叫び声上がる。俺はそっちの方を見る。ミュートが若い男に押し倒されていた。確かあの男はサトラップ。俺より前に紙を引いたヤツだ。彼の手には小さなナイフが握られていた。

「ミュート……」

「全員、動くなよ！ ハプスブルク、テメエは俺以外で3人殺せえ！ じゃねえと仲間の女ぶつ殺すぞ！！」
「そ、そんな！」

アイツ、ミュートを！ でも、俺も、他の人もどうする事も出来ない。もし、俺が彼女を助けようとするればアイツは彼女を殺すかも知れない。

うるたえるハプスブルクにブルボンが近づき、何かを耳打ちする。何を喋ったんだ？

ハプスブルクは手で口を覆う。しばらく無言の状態が続いた。が、その静寂は破られる。ケータイの着信音で。今度は何だ？

『主催者：サトラップ 脱落 残り2名を指名せよ』

サトラップが……脱落！？

「オイ、何のメールだ！ 俺にも教えろ！！」

脱落となる当の本人はミュートを片手で押さえ、もう片方の手にナイフを持っている為、ケータイを確認出来ない。だから、自分が脱落した事を知る事は出来ない。

サトラップを見てニヤリと笑うブルボン。何を言っただ？

突然、爆音が起こる。それと共に上がるのは空気を切り裂くようなミュートの悲鳴。俺は彼女の元に走り、サトラップの死体をどこかせ、彼女を助け出す。

「大丈夫か！？」

「う、あ、ト、トワイ、ラル……！」

震えるミュートの体を俺は抱きしめる。その服には夥^{おびただ}しい量の真

っ 赤な鮮血が付いていた。鉄のような二オイが俺の鼻に入ってくる。気分が悪くなりそうだ。

「……小声で指名してもいいようね」

ブルボンの冷たい声が聞こえてくる。それで俺は分かった。さっき、ブルボンがハプスブルクに言ったのは恐らく「小声でサトラップを指名しろ」。彼はそれを実行したのだろう。口を手で覆ったのは口の動きをサトラップに気づかれないようにする為か。

「さて、後2名だな。誰か死んでくれるヤツはいないのかしら？」

クツ、コイツ……！

「お、お前が死ねよ！ クソ女！」

赤髪をした少年がブルボンを指差して言う。ブルボンの冷たい瞳が彼を捉える。

「クソ女？ 誰に向かって言っているのかしら？」

「テムエに決まってんだろ！ そんな事も分かんねえのかよ！ 頭悪いな！！」

彼の言葉にブルボンの表情が変わる。その表情には怒りが含まれていた。

「私はルイの娘、ブルボン。アナタ、私の事をバカにしたよね？」
「な、何イ！ テムエが“ターゲット”の生き残りかッ！ お前のせいで3人も殺されたんだぞ！ ミッション14で自殺しろよブス女」

ブルボンの眉がピクリと動く。手に拳を握り、ワナワナと震える。鋭い目が彼に向けられる。コイツ、意外とプライド高いんだな。

「ハプスブルク、殺れ！ 3人目はあの少年、カールを指名しろ！」
「オ、オラツチの名前を！」

ハプスブルクがビクリと体を震わせる。彼が口を開きかける。

「カー…… い、いいんですか!？」

「殺れ」

「デメエ！」

「カ、カール！」

全員のケータイが鳴る。

「ちくしょオ！ オラツチは死にたくねえんだよ!!」

それが彼の最期の言葉だった。この図書室に来て3回目の爆音。血が飛び散り、人が死ぬ。図書室ではありえない光景だ。図書室に血の池が出来るなんて……

もう、イヤだ！ どうなってんだこのゲームはッ！ いつになったら終わるんだ！ 出口はどこだ！ 主催者って何者だ!!

ミッション15* 指名は破滅（後書き）

【現在情報】

逃走者：8名

脱落者：42名

【ミッション15の順番】

- 1、ピューリタン／女性／24
- 2、クリミア／男性／16
- 3、サトラップ／男性／19（死亡）
- 4、トワイラル／男性／16
- 5、ミュート／女性／16
- 6、ハプスブルク／男性／14（指名者）
- 7、ビザンツ／男性／20（死亡）
- 8、レストル／女性／18
- 9、ブルボン／女性／16
- 10、レパント／女性／15
- 11、カール／男性／15（死亡）

ミッション15*とある少女と少年の最期

【B棟2F 図書室/クリミア 確認】

ビザンツ、サトラップ、カールが死んだかつ。これで残り1人が死ねばひとまずは安全だなっ。その後に引くヤツがまた数字を引いたらかなりヤバイケド。

それにしてもあのブルボンとかいう女、“フ란ツ―家”の人間だったのかっ。遙か昔、現在世界を支配している国際政府を設立させた3人の王。彼女はそのフ란ツ―家の王の子孫だったのかっ。

「残り1人、ね」

あの女とこの俺が結婚すれば俺は貴族になれるっ！ そうすれば莫大な財宝がニヤホニヤホと……！！

「ハアハア…… も、もうイヤだ」

「早く指名してくれないかしら？ 誰でもいいから。私の“奴隷”のハプスブルク君」

「んニヤ？」

奴隷の？ あのガキはブルボンの奴隷？ いや、この世界に奴隷制度はないだろっ。1800年前に国際政府がこの世界を統一した時に廃止されたはずだがっ？

「ハプスブルク君とはどのような関係でっ？」

「……ミッション4で私は彼を助けたのよ」

ミッション4？ 何だ、ソレ？ 俺は自分のケータイを確認する。

有った、ミッション4つ。

『主催者：ミッション4＊ハプスブルク 女の子の胸を揉む』

ニヤルほど。ブルボンは自分の胸を揉ませたのかつ。ちくしょう、俺がこのミッション受けたかったぜつ。ニヤへへへへ……

「そして、ミッション5で彼に経験させて上げたのよ」

ニヤへへへ、へ、へ？ ミッション5？ ミッション5は俺でも覚えているぞつ。衝撃的だったからなつ。確か、『ミッション5＊ブルボン 性行為を行え』だったかニヤっ？ うん、そうだつ。つて事はブルボンとハプスブルクはミッション5でっ……！

「さて、早くしてくれないかしら？ このままだとタイムリミットの1時間を超えてしまうわよ？」

「……………」
「ご苦労様って言って上げるわ。私はアナタの代わりを見つけてこのゲームから脱出する。そして、フランツー家の当主となる」

と、当主っ！？ そういえばフランツー家の当主、ルイとその妻、一族はこれまでのミッションで死んでたなつ。という事は彼女がフランツー家の最後の人間か。

「…………ミッション4で助けてくれたのは感謝しますよ。でも、ミッション5で無理やりやらされ、その後はそれを理由に僕を奴隷のように使ってきましたね」

「……………」

「僕だって、プライドはあるんですよ？ それなのにアナタは僕を…………！ アナタは他人を自分より下だと思っている。アナタはお力

ネと権力で他人を不幸にする！」

ハプスブルクのヤツがブルボンを睨めつけながら言う。その声は微妙に震えている。それが怒りなのか恐怖なのかは俺には分かんねえがっ。

「何が言いたいのかしら？」

「横暴で知られるフランツー家はここで終わりです」

「……………！ ま、まさか！」

ブルボンの表情に初めて恐怖が現れる。むむ、さすがの彼女でも恐れるか。そして、ハプスブルクは彼女を指名して殺す気だっ！
お、俺の財宝があっ！！

「や、やめ…………」

「ブルボン！ フランツー家は今日で滅亡だ！！」

言っちゃったかっ……………！

全員のケータイが鳴る。主催者からのメールだな。

『主催者：ブルボン 脱落』

「クッああッ……………！ この私が、私が！ フランツー家の当主となるハズだった私がッ！」

ブルボンが膝をつく。その顔は、目は、ハプスブルクを睨めつけていた。さっきのカールの時とは違い、恐怖も含まれていた。

彼女の目から一筋の涙が頬を伝って流れる。悔しさと恐怖が混じった目をハプスブルクに向けていたが、突如、彼女は自爆する。大きな爆音を立てて。彼女の体は真っ赤な炎に包まれる……………

「クッ、ウッ…… これで、僕も、死…… 4人も殺せば、当然ですよねッ！」

そこまで言った瞬間、彼もまた爆発する。クあッ！ 爆風が目に染みるッ！ …… でも、これでひとまず危機は去ったようだなッ。フランツー家の財宝に有りつけなかったのは残念だけだなッ。

【B棟2F 図書室／トワイラル 確認】

ブルボンとハプスブルクも死んだ。これで残っているのはたった6人しかない。このゲームが開始した時はあんなに多くの人がいなのに、もう6人しかない。みんな死んでしまった。もう、終わりだ、何もかも。

俺も、もう限界だ。どうしたらいいのか、もう分かんねえよ。何が望みなんだ、何をすれば終わるんだ。ミッションはどんどん難しくなる。仲間も減っていく。無残に殺されて……

「次、私だよ。引くよ？」

「勝手にしろ」

俺に聞くなよ。もう、何もしたくない。何も考えたくない。何も

……

「……×だよ」

「最後はアタシだよ。じゃ引きます」

最後のレパントが無理やり笑顔を作りながら箱の中に手を入れる。すぐに紙は取り出された。彼女はそれを広げていく。そして、紙を血まみれの床に落とした。……×だった。

その時、全員のケータイが鳴り響く。もう、見る気もなかったけど、俺はケータイを開け、メールを確認する。

『主催者：ハプスブルク 指名完了』

『主催者：ハプスブルク 脱落』

『主催者：ミッシェン15*成功』

何が成功だ！ 人が死んだミッションに成功なんてあるかよ！

ふざけんなッ！！

薄暗い図書室。ケータイのディスプレイが俺の頬を青白く、不気味に照らしていた。

ミッション15*とある少女と少年の最期（後書き）

【現在情報】

逃走者：6名

脱落者：44名

【現在の生き残り】

ピューリタン／女性／24

クリミア／男性／16

トワイラル／男性／16

ミュート／女性／16

レストル／女性／18

レパント／女性／15

ミッション16＊血と死の学校

【B棟2F 図書室／レパント 確認】

ミッション15は終わった。でも5人の逃走者が死んだ。アタシは生き残ったけど、この後も生きれるかどうかは分からない。

トワイラルは希望を失ったらしく、図書室の椅子に座り込んで何も喋らない。ミュートは静かに泣いている。ピューリタンはウロウロと落ち着きなく、辺りを歩き回っている。クリミアはずっとケータイを触っている。レストルは……何かを呟いている。

「こうなるのは“分かってた”のに…… 脱落は解放、解放は死

…… ゴールは……ない」

………？ 分かってた？ どういう意味？

【B棟2F 図書室／クリミア 確認】

さて、この俺はどうするかな。ここで待っても死を待ってるだけだな。俺も行動していかないと……

そう思っていると今までウロウロしていたピューリタンが歩き始める。ん？ どこ行くだ？ 図書室の出入り口に向かっているけどよあつ。

「どこ行くだ？ ピューリタンっ」

「出口を探す」

「出口イ？ そんなものあるのかっ？」

「……………」

チッ。無視かよつ。まあ俺も彼女について行ってみるかねっ。何か発見出来るかも知れないしなつ。出口を見つけたら真っ先に逃げてやるっ！ ニヤハハハ、このクリミア様こそゲームの勝者になつてやるっ！

【B棟2F 廊下ノピューリタン 確認】

廊下は薄暗い。気のせいだろうか？ なんだか、今までよりも暗くなっている。図書室以外にもう人はいない。A棟にはもちろん、B棟の図書室以外には誰もいない。

「ニヤハハハ…… そこら中に血が飛び散つてやがるぜつ。ここはどこだよ、本当に学校かねっ……」
「誰かが殺されたんだろつな。仲間同士での殺し合いか、ミッシェン失敗で死か、自殺か……」

50名は今や6名。44名が死んだ。廊下に飛び散った血。真っ赤に染まった何らかの破片。ここで死んだ者の武器か持ち物が、それとも肉片か……

ブーツの先にブヨブヨとした柔らかいモノがぶつかる。……人の内臓……！ 気をしっかり持てッ！ 落ち着くんだ、私。

「ハア、ハア、ハア……！」

殺された人。どんな風に殺されたんだ。どんな状況だった。――落ちていく体の一部。バラバラに体を引き裂かれたか？ なにでどうやって、誰がそんな人道外れた事を、何の目的で！ 他の部分はどこ行つた！ 持ち去つたのか！ それとも食べたか！ カニバリ

ズムか！！　どんな味がした！！　適度に温かくて柔らかくて、歯
ごたえ十分だったか！！！！

「お、オイっ、大丈夫かつ？」

「え、あ、ああ……」

私は我に返る。全身からイヤな汗が吹き出ていた。額の汗をガク
ガクと震える袖で拭う。荒い呼吸を整え、廊下を進む。もう、B棟
とA棟を繋ぐ廊下だ。

静まり返った学校。そこら中に血の跡。壁には赤い人の手形。血
の付いた手の平で壁を触ったのだろう。赤い手形は1つじゃなく、
いくつもあった。

「A棟に、行こう」

「お、オッケーっ」

鉄のニオイが充満するここ。どれほどの血が流れたのだろう。ど
れほどの苦痛と恐怖と死がここに訪れたのだろう。

冷たい渡り廊下を歩く。ここも血と人の衣服の一部と体の一部が
……　アレは、脚か？　まるで引き千切られたような切り口だ。切
り口から僅かに出ているのは血管……　切り口の周囲には赤い血。
血が抜けた為か、それは青白くなっている。

「A棟、だなっ」

「右に進めば職員室……　“200枚の部屋”、だ」

ミッション8の時の舞台。あそこでガズナという男性が死んだ。
確かハプスブルクが5枚引いてガズナが200枚目を引いて死んだ。
私はその職員室にフラフラと進む。なぜか扉が壊れていた。誰が
壊したのかは知らないが、ずいぶん酷い状態だ。落ちているガラス

は扉の窓のガラスだろう。

「ニヤハ、200枚の時よりひでえなつ。血の量が半端じゃねえっ」

職員室は荒らされていた。めちやくちやに。……ナイフが落ちて
いる。歯の部分は血。乾き赤黒く変色していた。これで誰かを刺し
殺したのだろうか？

一枚の紙が落ちている。……誰が書いた？

『絆は簡単に裂かれます。私は生きる為に、友達を殺しました。そ
の友達を好きだった人が私を殺そうとしました。でも彼は別の人に
殺され、私はその人も殺しました。生きる為に人を殺す。そこで恨
みが生まれ、負の連鎖が始まります。いい方法があります。みんな
死ねばいいんです。死は解放！』

最後は殴り書きだった。これを書いたのは誰だろうか？ 今、生
き残った逃走者の中にいるんだろうか？ それとも死んだのだろう
か？

この辺に落ちているのはミッション8の時の紙、か。あの時はま
だ楽なミッションだった。それが懐かしく思える。多くの人が職員
室に集まってた時が懐かしい。

私は職員室から出る。暗い廊下。そこを進み、再び渡り廊下にな
どりと着く。ここを進めばまたB棟。いや戻れば、か？ さつき通っ
た道だからな。

私はひとまず、すぐ近くの進路指導室と書かれた部屋に入る。も
う、ゲームが始まって15時間は経つだろう。体力と気力は限界に
達していた。

「ここも何もねえなつ。あるのは書類と電源の入らないパソコンだ

けっ
」

私は机を見る。コップが2つ。中には飲みかけのお茶が入っていた。誰かがここで飲んで行ったのだろうか。

私は進路指導室から出て、不気味な薄暗い廊下を進む。再び職員室の方に向かって。しかし、そのまま職員室には入らず、職員室を左に曲がって近くの階段から下に降りる。

A棟1階。何かヒントでもないだろうか？ このゲームを終わらせるヒント、ここから脱出出来るヒントを求めて……

私は階段を降りながらケータイを操作し、メールを送る。すぐに私のケータイが鳴る。

『ピューリタン：ミッション16＊ピューリタン このゲームを終わらせる』

自分に向けた決意。終わらせる。絶対に終わらせる。終わらせられなければ自分が死ぬだけだ！

ミッション16*血と死の学校(後書き)

【現在情報】

逃走者：6名

脱落者：44名

A棟1F 廊下

ピューリタン／女性／24

クリミア／男性／16

B棟2F 図書室

トワイラル／男性／16

ミュート／女性／16

レストル／女性／18

レパント／女性／15

ミッション16＊ルイン・コンピューター

【A棟1F 廊下・校長室前ノピューリタン 確認】

私の前には校長室へと通じる扉。職員室の下に位置するのは校長室だ。何かヒントを見つけたい。そして、それを下にここから脱出し、ゲームを終えたい。私は解放されたいんだ。死という形ではなく、脱出という形で。

「校長室、か。俺はまだ入った事ねえなっ」

私は扉のノブに手をかけ、それを回した。ここに脱出の手掛かりとなるものを見つけない。そう願いながら私は校長室に足を踏み入れた。

【A棟1F ルイン・コンピュータールームノピューリタン 確認】

「ニヤ、ハ？ 何だコレっ？」

「……………？ ………………！？」

私は校長室と書かれた部屋に入ったハズ。間違いない。でも、この部屋は校長室ではなかった。もっと言えば学校にはないハズの部屋だった。

金属製の床と壁。その奥には柱が1本立っていた。白い装甲のようなものに覆われた緑色の柱。それがあった。……柱の左右にある白いカプセルのようなモノはなんだ？

「ワタクシは“ルイン・コンピューター”。脱落者を殺すコンピューターです」

「な、何っ!？」

「どういう事だ!？」

私はミッション8の時のガスナとミッション15で死んだサトラップやカール、ハプスブルクらを思い出す。彼らは全員、爆死した。何の前触れもなく、突然、爆発し、死んだ。

「アナタ方の体内に仕込んである爆弾を爆発させる。それがワタクシの仕事。マードネス・コンピューターの送ったミッションで失敗・敗北・指名で脱落者が決定されます」

マードネス。コンピューター!？ 何だソレは……？ まさか、こんなコンピューターが他にもあるのか!？

「失敗は1時間以内に実行できなかった者やミッションをムシした者。敗北は200枚目を引いた者やジャンケンで負けた者、数字の紙を引いた者など。指名は死のメールを送られた者、指名者に指名された者」

死のメール…… ユグノー、プレスビテリアン…… 指名者はハプスブルクで指名された者はブルボンやサトラップ達。ランダムで殺されたユグノーはマードネス・コンピューターに指名された、という事か。200枚目はガスナ。

「なるほど、つまりお前をぶっ壊せばこのゲームから“脱落”がなくなるんだな!」

「その通りですよ。マードネス・コンピューターを壊せばミッションがなくなります」

ペラペラと大切な情報を喋ってくれるアホなコンピューターだ。私はコイツを破壊する！ コイツがいなくなればミッション失敗でも死なない。誰も死ななくなる！

「……出口はどこだ？」

私は今すぐにこのコンピューターを壊してしまいたい衝動を抑え、落ち着いた口調で言う。

「A棟1Fの生徒用玄関、つまり、2FのA棟とB棟を繋ぐ渡り廊下の下辺りです。それ以外からの脱出は不可能。窓、扉全て絶対に壊せません。また開けません」

A棟の生徒用玄関、か。そこに行けばここから脱出できるんだな。あと、これだけは聞かないと……

「お前のようなコンピューターはいくつある？」

「このワタクシ、“破壊のルイン”とさっき話した“狂乱のマードネス”。そしてあと、1つ“逃走のエス……” “主催者”により情報はロックされました」

主催者によりロック！？ 主催者はコイツらじゃないのか！？ それにあと1つってまだあるのか？ いや、でも“ルイン”と“マードネス”さえ壊せば十分だ！

「……ユグノーや他の逃走者の仇は討たせてもらうつツ！」

「ニヤハハハ！ こいつが全ての元凶ならぶっ壊してやるよっ！」

クリミアが柱の近くに駆け寄る。そして、拳を握る。その間に私

はショットガンの銃口をルインに向け、標準を合わせる。

「ニヤハハッ！ 喰らえっ、 “ネコパンチ” ！」

彼は思いっきり白い装甲の部分を殴る。ネーミングセンスのなさ
はさておき、その一撃は強烈だ。たった一撃で装甲にヒビを入れ、
崩してしまった。白い破片が雪のように舞い、緑の本体が露出する。
私はそこに向かってショットガンを撃った。1つの弾が分かれ、
空中で分離し、緑の柱に穴を空ける。そこから白い煙が上がる。

「ワタ、クシを破壊する、気が！ 愚か…者め！ 追跡ハンター、
かか、れ！」

雑音が混じりながらもルインは命令を下す。すると、左右のカプ
セルが開き、中からスーツを着た男性が姿を現す。その目にはサン
グラス。

「ルインの番犬ですかねっ！ 首輪でもつけてなっ！ “ネコの爪
” ！」

クリミアが右の男に向かって爪で攻撃する。その爪は長く、先端
は尖っていた。……最初はその爪、なかったよな？ という事は出
したり戻したり出来るのか？ まあどうでもいいが。

斬られたハンターは僅かに後退する。だが、全く怯まず、無表情
で再び走って来る。私はショットガンで左のハンターを撃つ。左の
ハンターは吹っ飛び、壁に強く背中をぶつける。

「 “ネコパンチ” ！」

右のハンターもまた吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられる。だが、

両方ともまだ動き出す。アレ、人間なのか！？　こうなったら徹底的に、いや、それよりもまずは親玉のルインを壊す！

私は興奮で震える手でショットガンを持ち、緑の部分に狙いを定める。これで、これで悪夢は終わりだ！　銃口から力強い音と共に弾が放たれた。左右のハンターは今、立ち上ったところだった。

「よしっ、トドメだっ！　“ネコジャラシ”」

クリミアが何かを投げる。それはネコジャラシのような物だった。ただ、それが植物でない事はすぐに分かった。なぜならそれは真っ黒で恐らく金属製だったから。

クリミアのネコジャラシは緑の柱に突き刺さる。すでにさっきの、私の2度目の攻撃でルインからは僅かに炎が上がっていた。

「ク、おの、れ……！」

そう言った瞬間だった。緑の柱に突き刺さったネコジャラシが爆発したのは！　ネコジャラシはすさまじい、この学校が砕けたような轟音と激しい地響きをさせ、爆発した。

私の視界が一瞬、真っ白になった。次の瞬間には私自身が入り口に背中を強く叩きつけられていた。クリミアも私のすぐそばに吹っ飛ばされていた。

「ぐえっ！　し、死ぬっ……！」

「クッ……！」

背中に激しい痛みを感じながら、私はルインを見る。無残。柱の大部分が吹き飛んでいた。また、“番犬”の追跡ハンターも爆発に巻き込まれ、倒れていた。その体は炎に包まれている。

私は確信した。逃走者を脱落させるルイン・コンピューターが破

壊された事を、ユグノーやプレスビテリアンや他の逃走者の仇を打ったことを！

——ルイン、お前は“脱落”だ。脱落は爆死、だったよな。

ミッション16*ルイン・コンピューター（後書き）

【現在情報】

逃走者：6名

脱落者：44名

A棟1F ルイン・コンピュータールーム

ピューリタン／女性／24

クリミア／男性／16

B棟2F 図書室

トワイラル／男性／16

ミュート／女性／16

レストル／女性／18

レパント／女性／15

ミッション16＊脱出への希望

【A棟2F 廊下／ピュリタン 確認】

私とクリミアは煙の充満するルイン・コンピュータールームから出る。廊下は相変わらず冷たく暗い。そして、血のニオイが漂ってくる。

私はケータイを使い図書室のトワイラルに電話を入れる。彼はすぐに電話に出てくれた。

『もしもし……』

「私だ」

『ピュリタン…… どうした？』

「A棟1Fの校長室、職員室の真下に当たる部屋でルイン・コンピューターを破壊した」

『え、えッ！？ ルイン・コンピューター！？』

トワイラルは驚いたような声を上げる。どういつ事だ？

「何か知っているのか？」

『ルイン・コンピューターって……！ 俺らはミッション14の最中にマードネス・コンピューターをぶっ壊したんだ！』

マードネス・コンピューターを！？

『そんな、コンピューターは他にもあったのか！ クソ！』

「ま、待て、とりあえず話を聞け！」

私はルイン・コンピューターから聞いた話をトワイラルに伝える。

マードネス・コンピューターはミッションを下すコンピューター。ルイン・コンピューターは脱落時に体内の起爆装置を爆発させるコンピューター。出入り口の事。そして、もう1台、コンピューターがある事を。

『……ルインとマードネスを壊せたから十分だよな?』

「ああ、私もそう思う。ミッションを下せず、脱落させる事も出来なかったらもう十分だ。ゲームは成り立たない」

『じゃあ、俺も今からそっちに行く。A棟の1階の生徒用玄関だな。そこで落ち合おう』

「分かった。そこで待ってる。……ミッション17、トワイラル

A棟1階の生徒用玄関に來い」

『え? なんて?』

「フフ、気にするな。じゃ、待ってる!」

私はそこで電話を切る。行こう、脱出するんだ。これで終わりだ! このゲームも!

「……もう、何もいらねえっ、無事に脱出出来ればそれでいいぜっ」

クリミアがポツリと呟く。私は彼によって長い時間、捕まっていた。ミッション8が終わり、B棟でウロウロしていた所を捕まった。いきなり後ろから襲われて。

*

「ニャ~~~~ハッハッ!“闇のネコ討ち”!」

「な、何をす、る! 離せッ!」

「離して欲しければこのクリミア様に1000万円払えっ!」

「だ、誰がッ!」

*

その後は近くの視聴覚室に引きずり込まれて長い間縛られていた。視聴覚室には鍵をかけられたから誰も入ってこれない。縛られているからケータイも確認出来ない。時々、クリミアが見せてきたが。

だから、捕まっている間の情報はほぼ無に等しかった。今でも疑問に思う。なぜ50名の逃走者が急に死んでいったのか？ 明らかにミッション以外で死んでいる。何か他に原因がある。殺し合いでもこの死者数は説明つけにくい。

でも、今はいい。全て終わってから、このゲームから本当に解放されてから考えよう。今はここから脱出する事だけを考える！

「あの角を曲がったところが確か生徒用の玄関だっ！」

私はクリミアと共に角を曲がる。その曲がり角にも大量の血。でも、ここだけは死体はおるか、肉片すらなかった。誰かが持ち去った…… いや、今はいい。脱出だけを考えるんだ！

「確か、この上はA棟とB棟を繋ぐ廊下だったなっ」

「もう、通る事もない」

A棟とB棟を繋ぐ、廊下は1つだけしかない。それはこの丁度上に位置する。いずれ、トワイラル達が通ってくるハズだ。

「扉を開けるぜっ！」

ガラスで出来た扉。でも外は見えない。薄暗い青色の光があるだけ。クリミアがその扉を開ける。この先が脱出口だ！

「ニヤ、ハッ!?」

「な、何ッ!?」

扉を開け、外に出た。いや外じゃない!? 私とクリミアの前にあったのは小さな“駅”だった。線路が1本。そこにあるのは1台の列車。天井はコンクリート。床もコンクリートで出来ていた。ここは地下鉄……?

「と、とにかく、コレ動かす準備だっ!」

「分かった。トワイラル達が来たらすぐに脱出だ!」

クリミアが列車に乗り込む。

私は考えていた。ここがドコなのか、なんとなく分かったような気がする。ここは学校じゃない。ここは地下に造られた施設。このゲームを開催する為だけに造られた施設だ。

私たちは恐らくこの列車に運ばれてきたんだ。“誰か”が、私たちをここに連れてきた。その“誰か”こそがきつと主催者だ。

ここから出たらきつと主催者に出会う。彼は今も私たちを監視しているに違いない。きつと出た先に主催者が……!

「みんなの仇は絶対に討つてやる……!」

私はそう心の中で強く思い、列車に乗り込んだ。——主催者を倒す!

ミッション16＊脱出への希望（後書き）

【現在情報】

逃走者：6名

脱落者：44名

地下ステーション

ピューリタン／女性／24

クリミア／男性／16

B棟2F 図書室

トワイラル／男性／16

ミュート／女性／16

レストル／女性／18

レパント／女性／15

ミッション17*怪物の妨害——A棟内の逃走中！

【B棟2F 図書室／トワイラル 確認】

ピューリタンが教えてくれた情報。それは俺の心に希望の光を戻してくれた。マードネスとルインが破壊された今、もはやゲームは終わったも同然だ。後は脱出するだけ！

「ゲームから解放される？ 死という解放じゃなくて……？」

レストルだけは最初はこのゲームから解放される事を信じなかった。でも、マードネスやルインの2つのコンピュータ、出入り口の事を話すと最終的には信じてくれた。その表情にはまだ曇りがあったが……

「行こう！ トワイラル！」

「ああ、脱出すれば解放だ！」

俺とミュート、レストル、レパントは図書室から出て、血の二才イが充満する廊下を突っ走る。B棟2階の廊下。B棟からA棟に繋がる渡り廊下へ。そこからA棟2階の廊下。

俺達は職員室側の階段を使って降りようとした。が、そこへ突然、階段の方から巨大な人影が現れた。あの怪物だ！

「そ、そんな！」

「クッ、コイツ……！」

怪物は俺達の行く手を塞ぐように階段の前にいた。その姿はもはや変わり果てていた。腕は6本に増え、しかも全ての手首からは6

本の紫色の長い触手が生えていた。

「人ヲ、ヨコセ……！ 我ガ進化スル為ニ、人ヲ得レレバ進化出来ル！」

喋った！？ 人を寄越せ？ 人を得れば進化出来る？ そうか！ コイツ、人を食べて成長するんだ！ バラバラに体の一部だけを残して消える逃走者の原因はコイツか！

俺の頭にミツシヨン１１が思い浮かぶ。——追跡者が類する者を得する時…… コイツはプロイセンを食べて進化した。プロイセンだけでなく、他の逃走者をも食して……

「チツ、反対側の階段から降りるぞ！」

「わ、分かった！」

俺達はすぐに反対側の階段を目指して走り出す。だが、もちろん、怪物は見逃すハズもなく、爪を振り上げ、走ってきた。……早い！

このままだと追いつかれる！

「私に任せて！」

「ミ、ミュート！？」

ミュートは走りながら、ダイナマイトに火をつける。それを後ろに、怪物に向かって投げた。爆音が鳴り響く。学校が僅かに揺れた。後ろから熱風を受ける。反対側の階段の前で俺は振り返る。煙と炎しか見えない。死んだか？

「し、死んだ？」

ミュートがポツリと言った瞬間だった。煙の中から一本の触手が

飛んできて、それがレパントの脚に絡みつく。

「え、え！？ キャア！」

「レパント！」

そのまま、触手はレパントを煙の中に引きずり込もうと引つ張る。レパントの体は倒れ、煙の中に引き込まれていきそうになる。俺は引きずられていく彼女の手を掴む。

「クツ、クツソ……！」

「は、離れないッ！ 脚に絡まって……！ どうしょ！」

かなり強い力だ！ ヤバい、このままじゃ、レパントが！

「レパントを離せえ！」

ミユートが、持っていたダイナマイトに火をつけ、煙に隠れ、姿の见えない怪物に投げる。しばらくすると再び爆音。学校が激しく揺れる。レパントの脚に絡みついてた触手が根本から千切れる。

「い、今の内だ！」

「わ、分かった、ありがと！」

俺達はそのまま走り出す。階段を勢いよく駆け下り、……うわッ、こんな所にも死体が！ 誰かに突き落とされたのか！？ でも、構っているヒマはない。俺達はそれを無視し、一番下に降りる。

1階も青白く、薄暗い廊下が続く。その廊下を走る。一番先頭にレストル。その次にミユート。その次がレパントの手を引いて走る俺。

レパントの脚に絡みついた触手。それが生きているかのように暴

れるから上手く走れないのだ。そんな彼女の手を引いて走っていたのだから遅くなるのは当然だった。

「だ、大丈夫か!？」

「う、うん。この触手、少しずつ、動きが鈍く……」

その時、天井が崩れた! 瓦礫と一緒に降ってきたのは、あの怪物だった。ヌラヌラと光る赤い肌。異様にゴツゴツした体。蠢く腕の紫色の触手。血のこびり付いた長く巨大な爪。それらが不気味さを引き立てていた。

「そ、そんな!」

「一旦、引き返すぞ!」

俺は本能的に感じた。アイツの側をすり抜けて突破するのは不可能だと。反射的に彼女の手を引いて元来た道を引き返そうとする。

怪物が顔を上げる。赤い目の中央の黒い瞳がギョロリと動き、俺とレパントを捉える。ヤバイ! コツチに来る! 俺はダイナマイトを持っていない。他に武器になりそうな物もない。アイツが追いかけてきたら対峙出来ない!

そう思った瞬間、怪物のいる所で再び爆発が起こった。その爆発と共に俺は全力で走った。あの爆発はミュートがダイナマイトを投げたのだろう。

「ミュート、レストル、先に行つてろ!」

俺は腹の底から声を出し、叫んだ。

そのまま、階段を駆け上がる。1階から2階へ。2階から3階へ。3階から4階へ。A棟の最上階へと駆け上がった。俺は辺りを見渡す。プレートに1-3と書かれた教室が目に入った。ひとまず、そ

ここに隠れるか！

「こつちだ！」

「え、あ、うん！」

俺は勢いよく扉を開け、中に転がり込むようにして入る。そして、素早く扉を閉める。一気に全力疾走したから息が、俺は平気だが、女の子のレパントは……

「ハアハア…… ト、トワイラル、これ使えるんじゃない!？」

「え？ 何だ？」

俺はレパントの方を向く。彼女は大きな銃火器を持っていた。確か、政府軍が使用するアサルトライフルだったか？ なんでここに？ その時、俺は気づいた。この部屋にも血の二オイが充満しているのを。それも強く。

「ア、アタシ知ってるよ！ これって、ユグノーって人がミッション10を実行して手に入れたんだよ！」

「ユグノーが……」

ユグノーは確か、ミッション14でルイン・コンピューターによって殺された逃走者。俺はふと床に目を移す。大量の血。その奥に頭部と右肩、右腕を失った死体があった。そんなに大きくない死体。ユグノーの死体だろうか。

「走れるか？ あんまり長いするとミュート達が見つかるかも知れない」

「大丈夫。アタシ頑張るよ」

俺とミュートはお互い頷く。そして、教室のロッカーがある方の扉から出ようとした。

その瞬間、教室の教卓側の扉を壊してあの怪物が姿を現した！ソイツは素早く教室の中に入ってくる。俺達はほぼ同時に教室から飛び出し、職員室側の階段を目指して廊下を全力で走る。

だが、怪物も早かった。教室の壁をぶち壊し、そのまま走って来る。なんてヤツだ！

「ダメツ！ 追いつかれる！」

「先に行け！」

俺は元来た道を振り返る。怪物が丁度、触手を飛ばしてきた所だった。それが俺の右脚に絡まり引き倒される。その状態で俺は大型の銃火器・アサルトライフルの銃口を怪物に向ける。

引きずられる俺の体。これでぶっ倒れるなり、怯むなりしてこないと俺は終わりだな。それにもし、コイツが弾切れだったら終わりだ。

ミュート、レパント、レストル、ピューリタン、クリミア。もし、俺が死んだら行ってくれ。

「殺ス、我ハ進化スル……」

俺が死んだら、その瞬間、死亡メールが全員に届くハズだからな。ミッシヨンメールを送るのはマードネス。脱落させるのがルイン。だったら逃走者の生死と動きを常に監視するのが“第3”のコンピューターだろ？

「喰らえ、怪物——」

俺の前に迫る怪物。俺は目をつむり、アサルトライフルの引き金

を引いた。

ミッション17*怪物の妨害——A棟内の逃走中！（後書き）

【現在情報】

逃走者：6名

脱落者：44名

地下ステーション

ピュリタン／女性／24

クリミア／男性／16

ミュート／女性／16

レストル／女性／18

A棟3 - 4F階段

レパント／女性／15

A棟4F

トワイラル／男性／16

ミッション18*逃走者VS追跡者

【地下ターミナル 列車内ノピューリタン 確認】

レストルとミュートがこの列車に来てから10分。トワイラルとレパントはまだ来ない。彼女たちの話によると、トワイラルとレパントは怪物に襲われ、離れ離れになってしまったらしい。

……怪物って何だ？ 幸か不幸か、ずっと捕まっていたせいで私はその怪物に会っていない。会いたくもないが。

私がウロウロと歩いていると、列車の扉が開かれる。クリミアが慌てて構える。が、入ってきたのはレパント。そして、彼女の後ろには……！

「トワイラル！」

「ニヤハ、生きてたのかっ！」

レパントの後ろから現れたのは、頭から血を流し、体の至る所に傷を付けたトワイラルだった！

「大丈夫！？」

「あ、ああ、何とかな。死にかけたケドな」

「怪物は倒したの？」

「いや、俺はヤツの目に銃弾ブチ込んだただだからたぶん、まだ生きています。そうとう、のたうちまわってたケドな」

目に銃弾って普通、脳を貫いて死にそんなもんだが。……それでも生きているから怪物なのか。

「じゃっ、揃ったようなんぞっ、出発するぜっ！」

クリミアがそう言うと、運転席でコントロールパネルを操作し、列車を出発させる。この列車には窓がない。だから外の様子は分からない。まあ、大した事じゃないのだが。

外に出たら主催者と戦う事になるかも知れない。もし、主催者がいたら、絶対に倒してやる。ユグノー達の仇を討つ！

【地下ルート 列車ノトワイラル 確認】

……あの怪物は生きているだろう。

あの時、引きずられている時、俺は発砲した。それがたまたま、怪物の目に直撃し、俺は触手から逃れられた。階段から降りる時、一度だけ怪物を振り返った。銃弾を受けた左目を押さえ、のた打ち回っていた。きっと死んでない。

「ねえ、もしあの怪物が地下の学校から出てきたら……」

ミユートがそう言った時だった。後ろの、後続の第2車両から大きな音が聞こえ、列車が僅かに揺れた。何か大きなモノが乗ったような音が……！

「な、なにッ！？」

「何だ？」

「ニヤハッ！？ まさか……！！」

俺は第1車両と後ろの第2車両の扉を開ける。そこから第2車両を覗く。……思った通りだった！

「な、何だ、アイツは！」

「アイツが、怪物よ。私たちを殺して解放しようとする」
「ニヤ、ニヤっ！？ アイツがつ！」

赤くヌメヌメしてそうな肌。6本の腕と各腕から伸びる触手。赤黒い血の付いた長い爪。赤い目、左目は潰れていた。

クソッ、マズイぞ！ 今更列車からは降りられない。コイツを倒さない全員が死ぬ。

「チッ、メールの来ないミッションって言った所か！ 逃走者全員、コイツを殺せ。さもなくば死ぬ、ってかよ！」

ピューリタンが震えた声で言う。その手には強く握りしめられたショットガン。

「ア、アタシはまだ死にたくないッ！ 喰らえッ！」

レパントがユグノーのアサルトライフルを使い、怪物に向けて連射する。おびただしい数の銃弾が第1車両から第2車両に向けて放たれる。

弾が回転しながら、怪物の体にめり込んでいく。めり込んだ所から飛ぶドス黒く赤い血。脚、腕、触手、胸、肩…… 至る所に銃弾が撃ち込まれていく。だが、怪物は怯まず、どんどん距離を縮める。

「クッ、あッ、倒れてッ！」

レパントが必死に連射を続ける。だが、怪物は倒れない。何発かは頭に撃ち込まれたハズなのに、何で死なないんだ！

第2車両の中央部に来た怪物は腕の1本を振った。そして、次の瞬間には触手がレパント目掛けて……！

「危ないッ！」

また、捕まって……！ いや、違った。怪物にレパントを捕まえるつもりはなかった。怪物は……！

「……………！」

血が飛ぶ。“人の”血が飛ぶ。赤い鮮血が第1車両の銀色の、金属の床に落ちた。

「ガッ、ハッ……………！」

「レ、レパント……！」

触手は彼女を捕えるんじゃないで、彼女を“殺す”つもりだった！ 彼女の腹部に刺さった触手。刺さった部分から血がダラダラと流れ落ちる。

怪物は学習したんだ。A棟の時のように相手を捕まえていたら、また俺達が彼女を助けようとする。その隙について攻撃が加えられる。

また、誰も助けなくても、彼女は銃火器を持っている。獲物であるレパントを自分に近づけたらそれで狙い撃ちされる。至近距離からだったら急所を狙いやすい。

だから、獲物は殺して手に入れる事にしたんだ。反撃されないように。また、逃げられないように。

「アッグウッ……………！」

レパントの持っていたアサルトライフルが床に音を立てて落ちる。その周りには鮮血……

「ニヤ、ヒイツ！ 死ねイツ！」

隙をついてクリミアが黒い物を投げる。それは空中で曲線を描いて、怪物の胸に突き刺さる。怪物はそれを取ろうと右腕の1本を動かした時、それは大爆発を起こす。その爆発はダイナマイトのよりも遥かに強烈な爆発だった。

「うわッ！」

「キヤアッ！」

その爆発で俺の体は後ろに倒される。そんな俺の目に入ったのは、下唇を噛み締め、手を握り締めるレストルの姿だった。

「……多くの死、新たな死……呼び寄せ、私が、槍……」

「………？ 何を言っている？ どういう意味だ？ 俺が彼女に真意を聞こうとしたが、それはクリミアの声で遮られる。」

「ニヤにイツ！？ アイツ、生きてるっ！ どうなっただっ！！」
「……確かに、怪物だな！」

俺は第2車両の方に目を向ける。第2車両はボロボロになり、炎が上がり、煙が渦巻いていた。その中を進む赤黒い怪物。ダメージは少ない。その赤い目が俺達を捉えていた。見失うまで追いかけて来るのか！？

「……“ミツシヨン30”は成功させない……」

どうすればいいんだ……。あの爆弾を使い続けると俺達も危険だ。もしかしたら、爆発で第1車両も壊れてしまいかも知れない。それ

だけで済めばいいけど、脱線して、全員が……！

でも、怪物がコッチに乗り込んで来て、全員が殺されたら同じ事だ。アサルトライフルといった銃火器もあり効かない。だったら死を覚悟でダイナマイトか、クリミアの爆弾で……

「……悲劇は繰り返させない……」

いや、待てよ。1発じゃダメージは少なかったんだぞ。アイツを倒すのなら10発ぐらいぶち込まないと死なないんじゃない…… 10
発もやれば間違いなく全員死ぬ。

「ニヤハ！？ 正気かお前っ！？ 絶対に死ぬぞっ！？」
「構わない！」

そこで俺ははつと我に返る。今の声はクリミアとレストル……？
クリミアがたくさん黒い爆弾を渡し、運転席でコントロールパネルを操作する。クリミアの爆弾を受け取ったレストルはそれを白い袋に詰め、第2車両の方に向かって歩き出す。

「な、何をする気だ！？」

「……第1車両と第2車両を切り離してアイツにトドメを刺す」
「何ッ！？」

「アイツの脚の速さは異常だよ。きっと第2車両を切り捨てても、すぐにここに追いついて乗り込んでくるから……トドメを刺さないとけないの！」

そう言うレストルはそれを持って、走り出す。それと同時に大きな、何かが外れたような音が第1車両と第2車両の間から聞こえた。

俺に彼女を止める時間はなかった。俺が何か言う前に、彼女は袋

を持って、片手にクリミアの爆弾を持って第2車両に飛び移った！

「や、やめろ！ お前も死ぬぞ！！」

俺がそう言った時、すでに第2車両は離れ始めていた。第2車両にいた怪物は右腕の1本を振り上げ、レストルを床に押し倒す。袋は床に落ち、クリミアの爆弾がいくつか転がる。

急速に遠ざかり、小さくなっていく第2車両。俺が最後に見たのは左腕を振り上げ、レストルを刺し殺そうとする怪物と、彼女が片手に持っていた爆弾を炎の中に投げ込む瞬間だった。

「レストル……！」

暗いトンネルの中に消えていく第2車両。それが一度だけ腹に響く轟音と炎を上げた。それと同時に第1車両も激しく揺れた。第2車両でレストルの持っていたクリミアの爆弾が全で一気に爆発したのだろう。

第2車両は吹き飛んだ。レストルも一緒に。そして、あの怪物もさすがに死んだだろう。

「……レパント、大丈夫か？」
「……………」

彼女は無言で頷く。早く手当してやらないと、な。……もう、誰も死なせない。レストルが俺達全員の命を助けてくれた。自分の命と引き換えに。その命、もう絶対に失わせない！ もう絶対に誰も死なせない！

列車は止まる。駅についたようだ。

終わる。人が簡単に死んでいくゲームも、怪物の脅威も。ロマノフ、プロイセン、オスマン、ハプスブルク、ブルボン、ビザンツ、

レストル、その他大勢の逃走者達の犠牲を持ってこのゲームは終わる。

「じゃ、降りますかねっ……」

俺達は列車から駅に降り立つ。そして、近くの階段を上り、スライド式の扉を開ける。その先にはエレベーター。全員が入った事を確認し、ボタンを押す。扉は閉まり、エレベーターは上に向かって動き出す。

ゲームは終わっても、俺にはまだやる事がある。主催者をぶっ潰し、みんなの仇を討つ！ 絶対に主催者を倒すんだ！

エレベーターは止まり、再び扉が開く。

「行こう」

エレベーターから降りる。出た所は分からないが、どこかの建物内で電気はついていない。近くには受付を行う所。そして、その先にはガラスと金属で出来たドアがあった。外は見えないようになっている。時間は夜なのか、暗く、人工の白い光しか入ってこない。

俺は扉に手をかけ、押した。人工の白い光が俺の目に入ってきた。それと同時に冷たい風が俺の体に当たる。間違いない。外だ！

ミッション18*逃走者VS追跡者(後書き)

【現在情報】

逃走者：5名

脱落者：45名

地上出入り口

ピューリタン／女性／24

トワイラル／男性／16

クリミア／男性／16

ミュート／女性／16

レパント／女性／15

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5823x/>

逃走中 ルイン・エスケープ

2011年12月27日19時52分発行